法隆寺講堂北室ヲ造ル

厨家案主

后祖母法事

修理職長上

住算　正暦二補、

〔聖徳太子傳私記〕下　法隆寺○略中

次講堂○略中

正面在金鼓一口、延長三年乙酉歳、焼失了、同時北室焼畢、正暦二年辛卯歳、被造了、

公家、

〔類聚符宣抄〕七　補抄符廳直文殿等史生使部事

左文殿使部河内廣延

右定厨家案主淡海安延拜任大膳少属之替、

正暦二年五月二日

判

〔小右記目錄〕二十一　庶人卒事　正暦二年八月十七日、后祖母法事事、

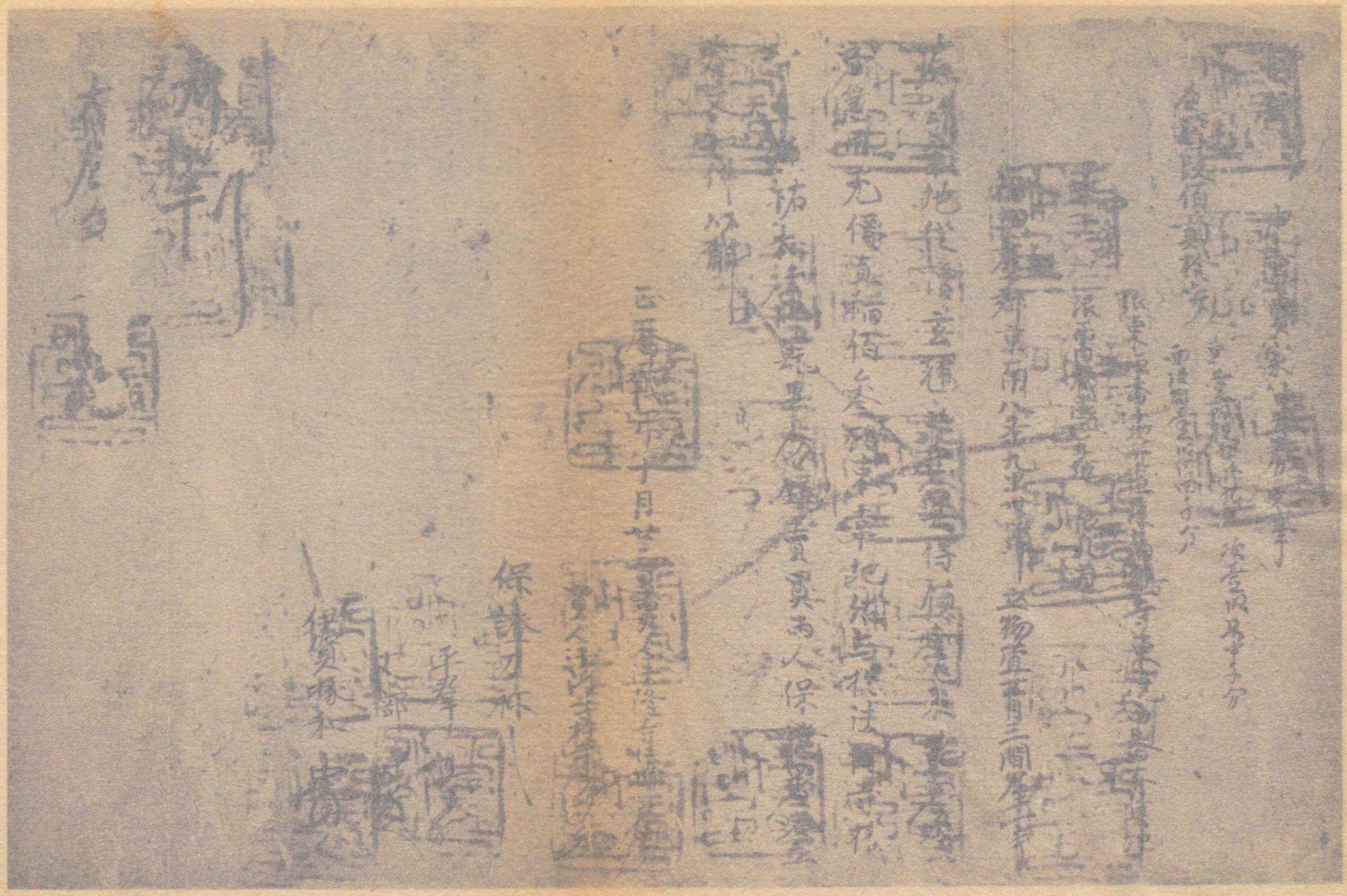
〔類聚符宣抄〕七　補石灰木工修理職長上事

正暦二年十月八日南申文　權中納言　左中辨（扶義）

修理職申請清世吉光、土師吉富等補任長上事、依請、

右少史安茂忠

家地賣券　大和法隆寺所藏　原寸



東京堂印刷社製版

家地　上道爲象死去

生死、

〔外記補任〕二　權少外記上道朝臣爲象　五月一日死、

賣買、

〔吉田文書〕○一　攝津

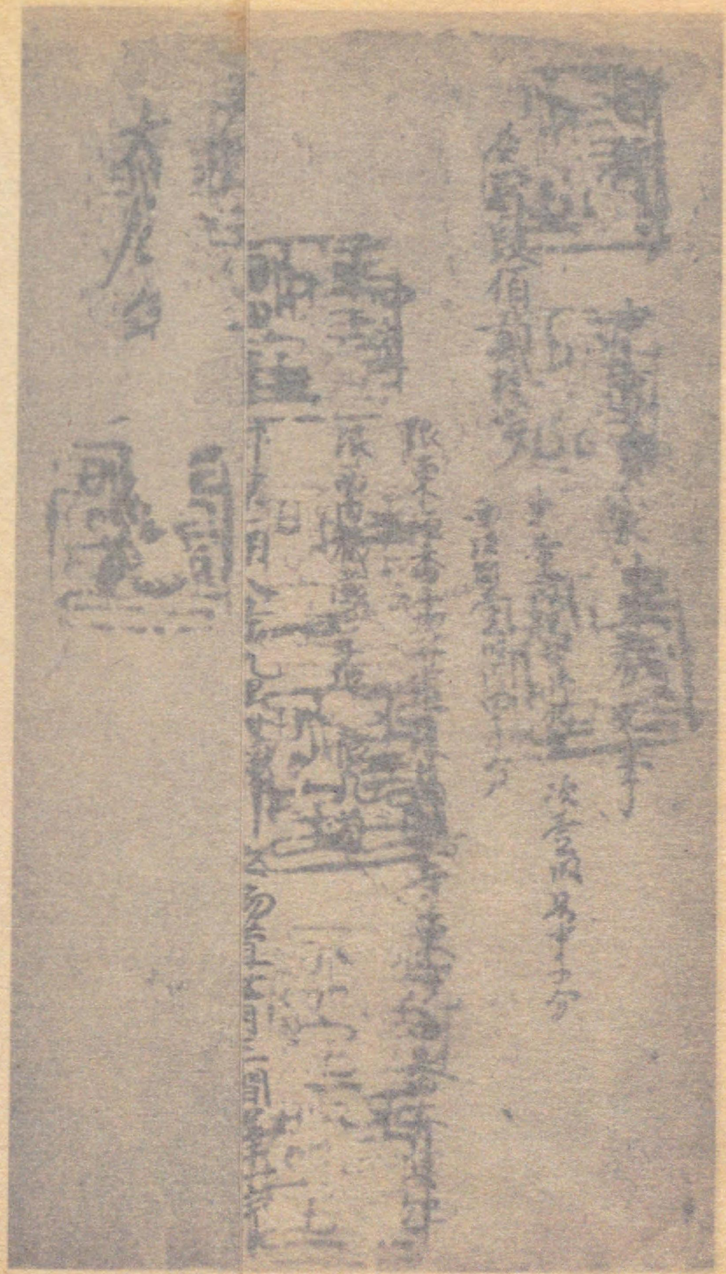
謹解　申賣買家地立券文事

合肆段佰貳拾步　東壹段地　小法師丸分、西垣副壹段同田子分、次壹段號申子分、（田カ）

家地賣券　大和法隆寺所藏

原寸　縦〇・三〇〇米

東京寫眞印刷社製版



原寸　縦〇・三〇〇米

東京寫眞印刷株式會社製版

上道爲象死去

家地

鵤寺東院ノ西香木堂

直稻

生死、

〔外記補任〕二　權少外記上道朝臣爲象　五月一日死、

賣買、

〔吉田文書〕一　〇攝津

謹解　申賣買家地立券文事

合肆段佰貳拾步東壹段地小法師丸分、次壹段號申子（田カ）分、西垣副壹段同田子分、

四至限東源香子地并中垣、限南鵤寺東院西香木堂地、西内藏滋正子地、限北道、

在平群郡京南八條九里卅四坪　立物壹葺三間屋一宇

右件家地、從僧玄耀之手買得領掌來也、而爲濟急用、充價直稻佰參拾束、常地沽與於法隆寺權寺主鎭祐大法師既畢、仍錄賣買兩人保證署名立券文如件、以解、

正曆貳年十月廿三日

賣人法隆寺法師「（自署下同ジ）」

買人法隆寺權寺主大法（大法師）「」

保證刀禰之

平群「隆仁」

郡判

大領 ○本書ニ、印文不明ノ印二十九顆ヲ踏ス、

丈部「[illegible]」

伊賀掾和「[illegible]」

後取及ビ殿上酒肴例ノ如シ

晝太白星見ル

正暦三年壬辰

正月 小盡 丙申朔

一日、丙申、諒闇ニ依リテ、節會及ビ小朝拜ヲ停ム、

〔日本紀略〕一條院 正月一日、丙申、依諒陰、無宴座會、

〔權記〕正月一日、丙申、於攝政直廬、右丞相(重信)以下會合、聊成讌飲、事了攝政以下引參上殿上、依諒陰、無節會、小朝拜、但新取事殿上酒肴如例、

五日、庚子、天文密奏、

〔權記〕正月四日、己亥、晝午時、太白經天見、又同日昏酉時、與太白竝在婁同宿、相去一尺八寸所、(許)

同五日、密奏、

東三條院ニ、舊ノ如ク、年官年爵ヲ上ル、

〔類聚符宣抄〕四停后宮職奉授院號事

左大臣(雅信)宣、奉勅、東三條院(詮子)御給年爵年官、宜如舊奉宛者、

正暦三年正月五日 少外記滋野

七日、壬寅、白馬節會ヲ停ム、

正暦三年正月一日 五日 七日

音樂ナシ
內論義
衆僧南殿ニ參上ス

〔日本紀略〕一條院　正月七日、壬寅、無節會、
八日、癸卯、御齋會、後七日御修法、是日、卯杖ヲ上ル、
〔日本紀略〕一條院　正月八日、癸卯、御齋會始、無音樂、卯杖付內侍所、
十四日、己酉、御齋會了、有內論義、
〔權記〕正月十四日、己酉、今日御齋會了、衆僧參南殿、依承和、天慶、天德例也、
〔東寺長者補任〕一　權少僧都雅慶　後七日法行、
十九日、甲寅、縣召除目、
〔公卿補任〕六
參議正三位藤道綱、三十八、右近中將、正月廿日兼備前權守、
藤安親、七十一、十修理權大夫、備中權守、正月廿日勅授帶劍、
〔外記補任〕二　大外記正五位下中原致時　正月博士、兼主稅助、
〔中古歌仙三十六人傳〕藤原道信　三年（正暦）正月十（廿）日兼美濃權守、
大江匡衡　三年（正暦）正月廿日兼尾張權守、
〔日本紀略〕一條院　正月十七日、壬子、除目始、
十九日、甲寅、同終、

〔敍位除目執筆抄〕正暦三年正月十七日、縣召、十九日入眼、　執筆
○中原致時補任ノコト、便宜合敍ス、

二月　大乙丑朔盡

三日、丁卯、諒闇ニ依リテ、釋奠ヲ停ム、

〈權記〉二月三日、丁卯、釋奠停止、依諒闇也、

大膳大夫及ビ勾當ヲシテ、諸國進納ノ調庸交易雜物年料ニ臨檢ヲ加ヘ、其合期見上ノコトヲ辨行セシム、

〈類聚符宣抄〉七　定所々別當勾當預事

右大辨平朝臣惟仲傳宣、權中納言源朝臣伊陟宣、奉勅、依大膳大屬川原兼之去年十二月廿八日奏狀、准有時例、以件兼之、宜爲諸國進納彼職調庸交易雜物年料勾當、大夫紀朝臣時文相加檢臨、令辨行其合期見上之事者、

正暦三年二月三日　　左大史多米朝臣國平　奉

四日、戊辰、祈年祭、

〈日本紀略〉一院　二月四日、戊辰、祈年祭、

六日、庚午、圓融天皇ノ御周忌御齋會ヲ行フ、

〈日本紀略〉一院　二月六日、庚午、奉爲圓融院法皇、周闋御齋會、請僧百口、

〈小右記目錄〉二十一院宮凶事　同（正暦）三年二月六日、公家被行故院御周忌御齋會事、

請僧百口

同年二月十二日、故院御周忌事、

〈榮華物語〉四　見はてぬゆめ　かくて月日もすきもていきて、正暦三年になりぬ、あはれにはかなきよになむ、二月には故院（圓融）の御はてあるへければ、天下いそきたり、御はてなとせさせたまひつ、よのなかのうすにひなとはてて、花のたもとになりぬるも、いとものゝはへあるさまなり、

〈枕草子〉はしたなきもの　るんゆう院の御はての年、皆人御服ぬきなとして、あはれなる事を、おほやけより始めて、院の人も、花の衣になといひけむ世の御事なと思ひ出つるに、雨いたう降る日、藤三位（二條乳母）の局に、みのむしのやうなるわらはの、大きなる木の白きにだて文をつけて、これ奉らむといひけれは、いつこよりそ、けふあす御物忌なれは、御しとみもまゐらぬそとて、しもは立てたるしとみのかみより取り入れて、さなむとはきかせ奉れと、物忌なれはえ見すとて、かみについさして置きたるを、つとめて手洗ひて、その卷數とこひて、伏し拜みてあけたれは、くるみいろといふしきしのあつこえたるを、あやしと見てあけもてゆけは、老法師のいみしけなるか（イナシ）手にて、これをたにかたみと思ふに都には葉かへやしつるしひしはの袖

とかきたり、あさましくねたかりけるわさかな、たれかしたるにかあらむ、仁和寺の僧正（寛朝）のにやと思へど、よもかゝることのたまはし、なほたれならむ、藤大納言そ、かの院の別當におはせしかは、そのし給へる事なめり、これをうへの御まへ、宮なとに、とうきこしめさせはやと思ふに、いと心もとなけれと、猶おそろしう言ひたる物忌をしはてむと念しくらして、またのつとめて、藤大納言の御もとに、この御返しをしてさしおかせたれは、すなはち又返事しておかせ給へりけり、それを二つなから取りて、急き參りて、かゝる事なむ侍りしと、うへもおはしますと御まへにて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽して、藤大納言の手のさまにはあらて、法師にこそあめれとのたまはすれは、さはこはたれかしわさにか、すきすきしき上達部、僧かうなとは誰かはある、それにやかれにやなと、おほめきゆかしかり給ふに、うへ、このわたりに見えしにこそは、いとよく似ためれと、うちほゝゑませ給ひて、今ひとすち御厨子のもとなりけるを、取り出てさせたまへれは、いてあな心う、これおほせられよ、あなかしらいたや、いかて聞き侍らむと、たゝせめにせめ申して、恨み聞えて笑ひ給ふに、やうやう仰せられ出てゝ、

御使にいきたりける鬼童は、臺盤所のとしこいふものゝ供なりけるを、小兵衛か語らひ出したるにやありけむなと仰せらるれは、宮も笑はせ給ふを、引きゆるかし奉りて、なとかくはからせおはしますと、猶うたかひもなく、手をうちあらひて伏し拜み侍りしことよと笑ひねたかり居給へるさまも、いとほこりかに、あいきやうつきてをかし、さて、うへのたいはん所にも、笑ひのゝしりて、局におりて、このわらはたつね出てゝ、文取り入れし人に見すれは、それにこそ侍るめれといふ、たれか文をたれかとらせしそといへは、しれしれとうちゑみて、ともかくもいはて走りにけり、藤大納言後にきゝて笑ひ興し給ひけり、

○御齋會行事所始ノコト、二年十二月八日ノ條ニ見ユ、

十四日、戊寅、列見、

〔日本紀略〕一條院　二月十四日、戊寅、列見、

十五日、己卯、式部大輔菅原輔正ヲ從三位ニ叙ス、

〔公卿補任〕六　非參議從三位菅輔正　二月十五日叙、持朱雀（圓融）院御骨賞、式部大輔如元、○中古歌仙三十六人傳同ジ、

〔日本紀略〕一條院　二月九日、癸酉、菅原輔正敍從三位、〇一代要記同ジ、

〔朝野群載〕九功勞申參議　勘解由長官從三位藤原朝臣在國、誠惶誠恐謹言、

請特蒙鴻慈、依大辨藏人頭勘解由長官勞任參議狀

右謹撿案內、公卿之選、其望有限、〇中略先朱雀院御時、朝忠卿、天曆六年抽拜參議、先太皇大后宮御時、兼忠卿、天曆八年超登八座、彼皆無本官之可拘、只依憐木幡之新勤也、圓融院御時、輔正卿因准此例、殊敍三位、〇中略長保元年六月廿四日〇署名略ス、

〇日本紀略、九日ニ作ル、今、公卿補任ニ據ル、

十八日、壬午、仁王會、

〔日本紀略〕一條院　二月十六日、庚辰、大祓、依仁王會也、

十八日、壬午、仁王會、

二十四日、戊子、諒闇竟ルニ依リテ、大祓ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　二月廿四日、戊子、於朱雀門大祓、依諒闇了也、

二十七日、辛卯、諸社ニ奉幣ス、

大祓　朱雀門ニテ行フ

道兼以下扈從ス　國司御儲ヲ爲ス　七箇日御參籠　御乘船唐崎ノ浦ニテ獻ヲ行ハセラル

〔日本紀略〕一條院　二月廿七日、辛卯、奉幣諸社、

二十九日、癸巳、東三條院、石山寺ニ參詣シ給フ、

〔日本紀略〕一條院　二月廿九日、癸巳、東三條院參詣石山寺、〇扶桑略記同ジ、

〔百練抄〕四一條天皇　二月廿九日、東三條院參詣石山寺、內大臣（道隆）已下扈從、

〔石山寺緣起〕正曆三年二月廿九日、東三條院當寺に臨幸あり、御供には中宮大夫道長廿七、直衣を著す、左衞門督、顯光廿八、大宮權大夫伊陟五廿六、兩人は束帶を著す、權中納言、道頼廿二、新中納言、伊周十九、右衞門督、時中五廿二、宰相中將道綱廿八、是も直衣を著す、左衞門督實資廿六、は束帶を著せり、修理權大夫安親七十一、は狩衣を著す、頭中將、公任廿七、頭ノ辨惟仲朝臣以下、殿上人數輩をの〳〵布衣を著して供奉しける、攝政殿、中關白、右大將濟時、は乘車にて、粟田口までまいりたまひける、內大臣粟田も車にて寺までまいり給けり、くるゝ程に、當寺の大湯屋につかせ給ふ、めくりに假やをつくりて、當國の國司御儲を奉仕す、七ケ日御參籠あり、御修法二壇修せらる、一壇は公家の御祈とかや、又御誦經あり、御影（願カ）のおもむきゆえありけるにや、還御には御船にめされて、からさきの浦にて御はらへなど侍けり、遊女等船にのりて、御船にこきそへて、御ともに侍り

遊女

けれは、女房幷供奉の上達部、殿上人、衣をぬきて遊女等に給けり、

是月、散位正五位下藤原仲文卒ス、

官歴

〔拾芥抄〕上末和歌家部二十九歌人三十六人　藤原仲文伊賀守、五位、至正暦三二月卒、七十、信濃守公葛二男、

〔三十六人歌仙傳〕散位正五位下藤原朝臣仲文信濃守從五位下公葛三男、（二イ）天暦□年補東宮藏人、天德二年閏七月任內匠助、御給、康保四年五月廿五日踐祚補藏人、本官、十月十一日敍從五位下、藏人勞、同日任加賀權守、五年正月任加賀守、天祿四年二月七日敍從五位上、治國、貞元二年正月任上野介、八月二日敍正五位下、造大垣功、（正暦脫カ）三年二月卒、年七十一、

世系

〔尊卑分脈〕藤氏宇合孫　式家

公葛

仲文　歌人、從五下、下野守、母、或興範子、卅六人歌仙內也、

聰亮　從五下、母、

歌仙

〔八雲御抄〕二撰集　作法部　一六位　同五位、拾遺、藏人仲文と有は別事なり、藏人なりしかと、ふるき五位なり、

〔和歌色葉集〕上　六　名譽歌仙者　俗百六十人

三十六歌仙ノ一人

拾遺　伊賀守藤原仲文　信濃守公葛息、或云常陸介云々、

歌什

〔二中歷〕五歌人歷　歌仙人卅六人　藤仲文

〔勅撰作者部類〕自皇帝至庶人之部　仲文五位上野介、改國茂、陸奧守藤原公葛男、至貞元八年、　拾遺集雜上、一、雜下、二、　新古今集戀五、一、　新千載集哀、一、　新拾遺集戀三、一、雜下、一、俳諧、　新後拾遺集雜下、一、

歌集

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二百十三家集目錄氷甲　仲文集　一冊

仲文ト冷泉天皇

〔歌仙家集〕十四〇東京帝國大學圖書館本　仲文集

（首書）古本六十四首、次第與刊家同、而歌員多少爲異、又勅集歌不附、刊本五十六首、勅集二首、合五十四首、次第等家本ト同、古三十三首多、刊家共廿一首多、但勅集歌除之、補三十三首別附、

仲文ト中宮

〔拾遺和歌集〕八雜上　冷泉院の東宮におはしましける時、月をまつ心のうたをのこともの よみ侍けるに、　藤原仲文

有明の月のひかりを待ほとにわか世のいたくふけにけるかな

〔仲文集〕〇宮內省圖書寮所藏　中宮の御前より、いしをつゝみて、これはなにそと

てなけさせたまへり、

こけむしていはほとならむさゝれいしをわかひろひけむ心あたらし

〔仲文集〕○宮内省圖書寮所藏　東三條院にて、粟田大將、仲春花如雪のことし（衍）といふ題をよませ給ふけるに、　中ふん

仲文ト兼通

ふりまかふ（ふイ）はなかゆきかとたとるまにわか夜（世イ）のいたくふけにけるかな

〔仲文集〕○宮内省圖書寮所藏　中將殿（四條大納言イ）（公任）せさいつくろはせ給に（けるイ）、心なき人のなてしこをすきすてたるに、

仲文ト公任

すきものをはなのあたりによせさらはこのとこなつもねたらましや（えイ）は

おほかせの又の日、いつれのほかよりもうたてこほれたれは、ちかきところのほとなる中將きんたうのきみ（四條の大納言殿イ）に、

わかやとはのわきのほかもとなりよりあれまさりたる心ちこそすれ

御かへし

となりよりあれまされりといふなるはいかなる風かみをはふくらん

三條殿にてきんたふの宰相八月許月のあかきよ、せさいのはなみ給に、

つねよりもこよひの月はさやかなれ秋のゆふへもたとるはかりに

〔仲文集〕○宮内省圖書寮所藏　三條殿かかしつきつくろはせたまふまつの、のわきにねをさかさまにてあるを、まいりて見るに、

そのかみはみちよをもあかすたのみこしまつなくならむとやはおもひし

〔拾遺和歌集〕九雜下　能宣（大中臣）に車のかもをこひにつかはして侍けるに、侍らすといひて侍けれは、　藤原仲文

仲文ト能宣

かをさして馬といふ人ありけれはかもをもをしとおもふなるへし

返し

なしといへはおしむかもとやおもふらんしかやむまとそいふへかりける

〔仲文集〕○宮内省圖書寮所藏　しもつけのかみすけあきらと、いひかはしたはふるゝことありて、　すけあきら

仲文ト下野守すけあきら

わかたのむかさまのとしのしるしあらはすきにし身とをかゝすもあらなむ

かへし

かさまをはかけすまゝなむあさゆふにみやのめならふおのれならひに

とて、宮のめのところは、はけしきにかすめてかきたり、めはみやにさ

ふらふ、四君かへし、

たかつきのいよ〳〵たかくなりぬれはけすにはくれしみやのめの物

又　なかふ

みやのめのおろしにいへといくはくのかさまり(マヽ)てはあらしとそおもふ

とのにさふらひて、すけあきらとふたり、ふなせうえうせむとさため

て、すさのみゆるに、ぬしはふなはいかにといへは、いまかひにこそは

つかはさめといひたるに、いひやる、

めにちかきわれをはおきてあふみふなかひへやり(にカ)つといふはまことか

かへし　すけあきら

つくまえのこひや見ゆるといのちをそかひにやりつるつるのこほりへ

しまのかみとゆきのかみと、せうさうとのにまいりあひて、かはらけ

とりてさすに、

はりまかたこなたかなたにこくふねのかたもほ(衍カ)なりともをしもわかれそ

〔仲文集〕くにもちかしき(マヽ)此使にありきける時に、されたるところのわか

き人々こゑしけれは、それうけさせ給へといひいれたりけれは、さう

仲文ト國茂

しのゑに女のかたありけるをやりて、これたまへといひいたしたま

へりけれは、くにもち深うみかこともときゝて、

たらちめの昔のおやのかほみれはうみのこともそ思ひやらるゝ

女返し、國茂かちゝはむまのかみにてなん有ける、

たらちめの昔のおやはさもあらはあれさてやはむまのかみのこはよき

〔仲文集〕〇宮内省圖書寮所藏　むこのともみつ、たえておきたりけるものゝくと

もはこふに、かゝみのとまりてありけるやるとて、

かけ絶ておほつかなさのますかゝみみすはわかみのうさもしられす

返し　ともみつ

君とわれかたみにみむとますかゝみそこにとまれるかけさえやうき

くにもちかめに物いひけるに、ことをいたしたりけるに、ひきてかへ

すとて、

かたらへとかひなかりけりむつことのしらへて返るねにしたかへは

おなし人ふくなるほとに、むこのくら人に、

きたりとはきくらむものをふちころもかけてあはれといふ人のなき

仲文ト婿ノともみつ

仲文ト國茂ノ妻

仲文ト左京

返し

いまはとてかへしゝよりもふちころもきたりときくはいとそかなしき

おなし人、左京きみに、

あなわひし人めのせきをこえわけてみちをわするゝ時のまそなき

返し

心にもあらすうかりしゆめちにはわすれぬものそわひしかりける

又をとこ、〇新拾遺和歌集、左京に云ひ遣しけるニ作ル、

ほともなくあけてわかれしあか月にいとゝつゆこそおきうかりしか〇第三句に、新拾遺和歌集はニ作ル、

仲文ト本院侍從

おとこをとせさりけれは、　左京

ともかくもいふことのはのみえぬかないつらはつゆのかゝりところは

かへし

あたならぬ心にかゝるつゆなれはいはてそおもふおきてこしより

ほん院のしゝうの君、くにもちかあふきをとりてこへとかへさて、又

のあしたに、

仲文ト左衞門內侍

君まても思下らぬ心にはあふきといふなたゝしとそおもふ

返し　をとこ

あらかへと人にいへとやいふなとやおもひかへせとかひなきものを

院の大將殿のさふらひにくりやかねぬなはたゝくを見て、

おなし人

くりやよりまたよひなれはねぬなはのわれらかくひなたゝくなりけり

かへし　しゝうの君

てもたゆくたゝくくひなものこらねはなほねぬなはのくりやくるしや

〔仲文集〕〇宮內省圖書寮所藏　正月七日、左衞門(宰相イ)の內侍、(にイ)

老らくも子日の松にひかれてやけふよりわかきなをやつむらん

おなし人のゆきのかみなる人のむすめけさうしける人に、

とけかたきしたひもしてもこゝろみむおもふ心のゆきのしまゝて

仲文ト衞門內侍

〔仲文集〕〇宮內省圖書寮所藏　くら人なりし時、衞門の內侍にくしをかりて、かへ

すとて、

ねきことにかくしかなはゝねくたれのおとろのかみもなためてむかし

仲文ト但馬ノ女

かへし

ねくとてもよからぬことはきく物のよにうるわしきかみの心は

〔仲文集〕○宮内省圖書寮所藏　みやつかへ人をかたらひしに、又ことをとこかよふときゝて、ひさしういかぬをおもひいてゝ、さとにいきたれは、月のあかきにいけあるところにて、なかしまのみつなみなといとおかしけれは、とみにものほらてなかめゐたるに、女なとのさてはといへは、くらへはやこのなかしまのおきつなみこすはたれかはうらみますへき

仲文ト舊妻

この女のもとに、女このあるをさためなしとおもひて、とはねは、人しれすくちぬるものはさをやまのはゝそはらちるこのはなりけり

この女は、たちまのかみなりけるおなしところのたらう君といふ人ゐたるところに、きあひたるに、おもたまふ人やとゝへは、人はいさとへはたちま我はたせちにおもくすとたらう君いひうとめつゝしたにかよはむ　なかふ

もとのめをやむことなきものに思ひなから、又しる人おほかりけるに、もとをはしのまにて物かたりなとして、こゝにゐたまへれ、いまゝいらむとていにけれは、まことゝてむしろのかきりにゐ、あか月にかへりきたるに、いたのうへにさへはかりおかれてひえにけりとてうらみけれは、

ことはりやしたはさこそはひえつらめきみにしくへきおもひなけれは

仲文

三月小乙未朔盡

三日、丁酉、御燈、

〔日本紀略〕一條院　三月三日、丁酉、○中略今日前齋宮二品輔子内親王薨、村上天皇第六女、年四十、

前齋宮二品輔子内親王薨ズ、

〔日本紀略〕一條院　三月三日、丁酉、

六日、庚子、奏輔子内親王薨由、

〔小右記目錄〕二十一親王女御薨事　正暦三年三月廿(六カ)日、内親王薨奏事、

〔本朝皇胤紹運錄〕

村上天皇

輔子内親王　齋宮、母同(中宮安子)承子、

〔榮華物語〕一月宴　九條殿(師輔)の女御(安子)、女七、九、十(輔子、資子、選子)の宮などあまたさしつゝきて

うまれさせ給て、猶この御ありさまよにすくれさせ給へり、

〔大鏡〕四右大臣師輔　第一の御むすめ(安子)は、むらかみの先帝の女御、○中略さて

この御はらにおはしましゝ、○中略女七の宮は、御物のけこはくてうせ給に

き、

○輔子内親王、初謁ノコト、應和元年十一月四日ノ條ニ、御著裳ノコト、

康保二年八月二十七日ノ條ニ、齋王卜定ノコト、安和元年七月一日ノ

條ニ、同御禊ノコト、同年十二月二十五日ノ條ニ、齋院ヨリ御退出ノコ

ト、同二年十一月四日ノ條ニ見ユ、

十五日、己酉、直物、

〔日本紀略〕一條院　三月十五日、己酉、直物、

二十四日、戊午、石清水臨時祭、

〔日本紀略〕一條院　三月廿二日、丙辰、石清水臨時祭試樂、

廿四日、戊午、石清水臨時祭、

〔權記〕(三)二月廿二日、丙辰、臨時祭試樂、主上服御直衣、

〔小右記目錄〕四臨時祭事　正暦三年三月廿四日、臨時祭事、

〔石清水文書〕五田中家文書附錄宮寺緣事抄臨時祭下

三年三月廿四日、戊午、石清水宮臨時祭也、(同(一條)(正暦))

使右大辨平惟仲朝臣○下略

奏薨

御世系

物怪

試樂

御直衣ヲ著ケ給フ

使

結願

二十七日、辛酉、季御讀經、
〔日本紀略〕一條院　三月廿七日、辛酉、季御讀經始、
四月一日、甲子、○略中季御讀經竟、
〔小右記目錄〕四季御讀經事　同(正暦)三年三月廿七日、季御讀經始事、

四月大　甲子朔盡

一日、甲子、旬、平座、見參
〔日本紀略〕一條院　四月一日、甲子、旬、平座、見參、
四日、丁卯、廣瀨、龍田祭、
〔日本紀略〕一條院　四月四日、丁卯、廣瀨、龍田祭、
七日、庚午、擬階奏、
〔日本紀略〕一條院　四月七日、庚午、擬階奏、
八日、辛未、灌佛、
〔權記〕四月八日、辛未、有御灌佛事、拾遺(誤脱)相公失禮、卿相以下莫不掩口摩(マヽ)御導師右方柱南入、最違例也、
九日、壬申、平野祭、
〔日本紀略〕一條院　四月九日、壬申、平野祭、
〔江次第〕六月四月平野祭　五位陪膳例　正暦三年四月九日、藏人頭右中辨俊賢(源)、供藏人式部丞知光、
十日、癸酉、梅宮祭、

陪膳　藤原誠信禮ヲ失ス

見參

〔日本紀略〕一條院　四月十日、癸酉、梅宮祭、

十三日、丙子、吉田祭、

〔日本紀略〕一條院　四月十三日、丙子、吉田祭、

十九日、壬午、齋院選子内親王御禊、

〔日本紀略〕一條院　四月十九日、壬午、賀茂齋王禊、

二十一日、甲申、攝政道隆、賀茂社ニ詣ヅ、

〔日本紀略〕一條院　四月廿一日、甲申、攝政參詣賀茂社、

二十二日、乙酉、賀茂祭、

〔日本紀略〕一條院　四月廿日、癸未、警固、

廿二日、乙酉、賀茂祭、

警固

解陣

祭使藤原齊信

廿三日、丙戌、解陣、

〔榮華物語〕見はてぬゆめ　一條のおほきおとゝ（誉光）は、六月十六日にうせさせたまひぬ、○中略　御太郎（誤信）松雄君とておはせしおとこにて、此ころ東宮權大夫にておはす、いまひとゝころ中將（衍誤）ときこゆ、その中將、此四月のまつりのつかひにいでたち給しかは、よろつにしたてさせ給て、をしかへして、あや

しの御車にて御覽して、つかひのきみわたりはて給ひにしかは、こと〳〵はみんともおほさて、かへらせたまひにしも、よの人おもひいてゝかなしかる、

二十五日、戊子、内大臣道兼、賀茂社ニ詣ヅ、

〔日本紀略〕一條院　四月廿五日、戊子、内大臣參賀茂社、上官前駈、

二十七日、庚寅、東三條院ニ行幸アラセラル、是日、權大納言藤原道長ヲ從二位ニ敍ス、

〔日本紀略〕一條院　四月廿七日、庚寅、天皇幸東三條院、奏樂賦詩、題云、管絃波上曲、于時母儀仙（詮子）院、御座大納言道長卿上東門第、

〔權記〕四月廿七日、庚寅、行幸於東三條院、御土門也、大納言道長敍從二位、家主也、

〔朝覲行幸部類〕同（正脱）三年四月廿七日、行幸東三條院、

小右記云、有御贈物、青御馬云々、

〔御遊抄〕二朝覲行幸　同（正脱）年四月廿七日、小右記（三脱カ）、上東門院、東三條院假所御（衍カ）也、

有詩、管絃波上曲、又有船樂、

〔公卿補任〕六　權大納言正三位藤道長、廿七、中宮大夫、四月廿七從二位、行幸

東三條日、

○扶桑略記、百練抄、異事ナキヲ以テ略ス、東三條院、藤原道長ノ第ニ遷御シ給フコト、二年十一月三日ノ條ニ見ユ、

公卿等舞人ニ衣ヲ賜フ

五月 小 甲午朔 盡

一日、甲午、遍照寺ノ塔ヲ供養ス、

〔日本紀略〕一條院 五月一日、甲午、遍昭寺塔法會、

〔百練抄〕四條天皇 一條院 五月一日、遍照寺塔供養、公卿舞人脫衣賜之、

○寛朝、遍照寺ヲ供養スルコト、永祚元年十月二十六日ノ條ニ見ユ、

十一日、甲辰、諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院 五月十一日、甲辰、奉幣諸社、

二十一日、甲寅、荒手結、

〔權記〕五月廿一日、甲寅、著府荒手結、兩佐有被召問之事、余有所陳申、雖未進怠狀之間、依被召問、不能參(行カ)參著、督實資令奏事由、府底年中大事手結也、而兩佐被召問之間、無人著給、若可令延日而行歟、只待天裁進退矣、宣旨云、且令進怠狀、且莫令闕公事者、督示送此由、其消息數度來、仍著行之、

二十六日、己未、京都洪水、

〔日本紀略〕一條院 五月廿六日、己未、東西京中洪水、

二十八日、辛酉、右近馬場ニテ競馬ヲ行フ、

攝政以下參會ス

〔日本紀略〕一條院　五月廿八日、辛酉、於右近馬場競馬、攝政、左大臣、右大臣、內大臣以下相率行向、

〔百練抄〕四一條天皇　五月廿八日、攝政、左大臣已下向右近馬場、有競馬事、

〔頭書〕「廿八日、權中納言著直衣、赤色織物下重、極見苦云々」、

雷鳴

六月小盡癸亥朔

一日、癸亥、京都洪水、

〔日本紀略〕一條院　六月一日、癸亥、雷鳴、東西京中洪水、

二日、甲子、雷鳴、大雨洪水、

小除目、

〔公卿補任〕六長保三年　非參議從三位平親信、五十七、正暦三(二イ)年六月一日任越前守、乘方辭替、

〔公卿補任〕六　參議正四位下平惟仲、四十九、同(正暦)三年六月日辭退近江介、

〔日本紀略〕一條院　六月一日、癸亥、○中略今日小除目、

〔小右記目錄〕五京官除目事　同(正暦)三年六月一日、小除目事、

○平惟仲辭任ノコト、便宜合敍ス、

松崎寺

八日、庚午、中納言源保光、圓明寺ヲ供養ス、

〔日本紀略〕一條院　六月八日、庚午、中納言源保光卿、供養松崎寺、號圓明寺、

〔百練抄〕四一條天皇　六月八日、中納言保光卿供養松崎寺、或云圓明寺、

行事

〔權記〕六月八日、庚午、被供養圓明寺、卿相以下莫不會集、備前守相(源)方朝臣行

事、儀式幷音樂事等也、

九日、辛未、自寺還詣内府、被命云、明日可參之由兼申事由、又中心所在也、而入道民部少輔女第一、昨午時許、長逝之由被送、仍不參、爲恨之甚、何事如之、今須後日必參彼寺、可申此慽之由、可申納言者、

〔伊呂波字類抄〕六 諸寺 末 松崎寺 權律師勸助居住於此所、

〔伊呂波字類抄〕十 諸寺 惠 圓妙寺 正暦三年壬辰六月八日庚午供養、

〔拾芥抄〕下 諸寺部第九 松崎寺 中納言保光卿、

太政大臣爲光ノ封百戸ヲ法住寺ニ施入ス、

〔日本紀略〕一條院 六月八日、庚午、〇中略今日勅以太政大臣封百戸、施入法住寺、

〇爲光、法住寺ヲ供養スルコト、永延二年三月二十六日ノ條ニ、薨去ノコト、本月十六日ノ條ニ見ユ、

十四日、丙子、彈正大弼從四位上源守清卒ス、

〔權記〕六月十四日、丙午、彈大弼從四位上源守清朝臣子刻卒、

〔本朝皇胤紹運錄〕

相模國ニ封ズ 後一條太政大臣又法住寺ト號ス

薨奏 四十九日法事

男誠信服解 男道信弔歌

有明親王

源守清 從四上、大弼、時子、左大臣仲平公女、母同、

十六日、戊寅、太政大臣從一位藤原爲光薨ズ、尋デ、正一位ヲ贈リ、恒德公ト諡ス、

〔公卿補任〕六 太政大臣從一位藤爲光、五十一、六月十六日薨、諡恒德公、封相模國、詔贈正一位、號後一條太政大臣、又法住寺、建立此寺、

〔日本紀略〕一條院 六月十六日、戊寅、太政大臣從一位藤原朝臣爲光薨、年五十一、七月十五日、丙午、詔、贈故太政大臣藤原朝臣爲光正一位、封相模國爲相模公、諡曰恒德公、食封資人悉同存日、本官如本、今日薨奏也、

〔權記〕六月十六日、戊寅、太政大臣從一位藤原朝臣爲光薨、申刻、年五十一、八月五日、丙寅、於法性寺、修故太政大臣卅九日法事、

七月十五日、丙午、有薨奏事、

〔小右記目錄〕二十一 公卿薨卒事 同三年七月十六日、大相府薨奏事、

〔公卿補任〕六 參議正四位下藤誠信、二十九、六月服解、〇復任ノコト、八月三日ノ條ニ見ユ、

〔拾遺和歌集〕二十 哀傷 恒德公の服ぬき侍るとて、

官歴

限あれはけふぬき捨てつ藤衣はてなきものは泪なりけり　藤原道信朝臣

〔千載和歌集〕九哀傷歌　恒德公かくれ侍りて後、かの常に見侍りける鏡の物の中に侍りけるをみてよみける、　藤原道信朝臣

としをへて君か見なれしますす鏡昔の影はとまらさりけり

〔公卿補任〕六　參議從四位上藤爲光、廿九、右大臣師輔公九男、母延喜第九皇女、前齋宮四品雅子內親王、天慶五年壬寅生、天曆十一正七從五下、故康子內親王給、天德二正卅侍從、同三正廿六左兵衞權佐、(右イ)同四正十三昇殿、同四五四服解、六月廿六復任、應和二正七從五上、中宮御給、廿三日右少將、同三正十三藏人、廿八日兼伊豫權介、康保三正七正五下、廿七日近江權介、同四六十昇殿、踐祚初、十六日藏人、新帝、九月一日東宮昇殿、十月十一從四下、少將勞、十四日昇殿、同五二十四權左中辨、少將、介如元、安和元十一廿七從四上、悠紀、十二月日止少將、同二正廿七兼內藏頭、三月廿六日止昇殿、依爲中務卿爲平親王家司也、四月廿八日轉左中辨、頭如元、八月十三日兼東宮權亮、十月十四日藏人頭、廿八、天祿元十二十六左中將、十二月卅日任參議、左中將如元、同二年正月廿九日兼備中守、

世系

天延元年正月廿八日任權中納言、同日從三位、七月一兼中宮大夫、同二年二月廿五申刻著座、同三年正月廿六日轉正、大夫如元、貞元元年正月七日正三位、不次敍之云々、越二人、同二年三月廿六日從二位、四月廿四日任大納言、廿五日大夫如元、天元元年十月十七按察使、同二年六月三日止大夫、同四年二月廿三日正二位、臨時、十月四日可敍從一位、而讓男從五上誠信敍正五位下、永觀二年八月十八日春宮權大夫、同月廿七日止權大夫、受禪、同日立太子、又兼大夫、十月十日可敍從一位、而讓男從五下齊信敍從五上、寬和二年六月止大夫、踐祚、七月廿日任右大臣、廿二日可敍從一位、而男誠信敍正四位下、永延元年十月十四日從一位、此日行幸攝政東三條之次、臨時敍之、正暦二年正月日聽輦車、九月七日任太政大臣、

〔尊卑分脈〕藤氏爲光孫　北家

辨五藏頭　爲光　九條右大臣師輔公九男、按察使、春宮權大夫、右大臣、中宮大夫、太政大臣從一位、母前齋宮四品雅子內親王、諡曰恒德公、號法住寺太政大臣、又一條、京極、

誠信　從三位、春宮大夫、母左中將敦敏女、

頭　齊信　權大納言、正二位、母同誠信、

道信　右中將、從四上、母伊尹公女、
公信　頭、從二位、權中納言、母太政大臣伊尹女、
長信　從五上、右兵佐、母山イ、
尋覺　僧正、母山イ、
良光　權律師、母山イ、
女子　母悦子、弘徽殿、贈從四上、
女子　中納言義懷室、母
女子　鷹司左大臣室、母
女子　御堂殿妾、母
女子　隆家卿室、母

〔榮華物語〕四　見はてぬゆめ　かくて月日も過きもていきて、正暦三年になりぬ、あはれにはかなき世になむ、〇中略一條のおほきおと（爲光）ゝは、六月十六日にうせさせたまひぬ、後の御いみな恒德公ときこゆ、女御（悦子）の御のちは、たゝ法師よりもけにて、世とゝもに御をこなひにてすくさせ給ふ、法住寺をいみしうめてたく、たうつくらせ給て、あけくれそこにこもらせ給てそ、おこ

女子　誠信
齊信

伊周室

選子内親王ノ御弔歟　法事

處分

なはせたまふ、哀にいみしうそ、御太郎（誠信）松雄君とておはせし、おとこにて此ころ東宮權大夫にておはす、いまひとゝころ中將（齊信）ときこゆ、〇中略齊信、賀茂祭使ト爲ル　コトニカ、ル、四月二十二日ノ條ニ收ム、女君たち今三ところ、ひとつ御はらにおはするを、三の御かたをは寢殿（伊周室）のうへときこえて、又なうかしつき聞え給ふ、四五の御かた〳〵もおはすれど、故女御（悦子）と寢殿の御方とをのみそ、いみしき物に思ひきこえ給ける、女子はたゝかたちをおもふなりとの給はせけるは、四五の御かたいかにとそをしはかられける、御いみのころ、此中將（齊信）のもとに、齋院（選子）より御とぶらひありけるに、かくなん、

いろかはる袖には露のいかならんおもひやるにもきえそいらるゝ

あはれなる事共、御法事やかて法住寺にてあり、一條殿いみしうなへてのところのさまならす、いかめしうまうにおほしをきてたりつれは、ひとゝ（爲光）ころうせさせ給ぬれは、いとおはしましにくけに、あれもていくも心くるしう、此寢殿のうへの御處分にてそありける、萬のものたゝこの御領にとそ、おほしをきてさせ給ける、

〔大鏡〕五　太政大臣爲光のおとゝ　是九條（師輔）殿の御九郎君、大臣位にて七年、法

傳
子女

住寺のおとゝと聞えさす、正暦三年六月十六日にうせ給ひにき、御年五十一、のちの御いみな恒徳公と申き、御子おとこ七人、女君五人おはしき、女二所はすけまさの兵部卿の御いもうとのはら、いま三所は攝政の御むすめのはらにおはします、おとこ君たちの御母、みなあかれ〳〵におはしましき、女君ひとゝころ(低子)は花山院の御時の女御、いみしうときにおはせしほとに、御子はらませ給ひて、やつきにてうせ給ひにき、今ひとゝころは入道中(義懐)納言の北方にてうせ給ひにき、男君太郎は左衛門督さね(誠信)のふときこえさせし、〇略この大納言になり給へるは、いまの中宮大夫たゝ(資信)のふの卿いとよおほえあり、よき人にておはしき、又權中將みち(道信)のふのきみ、いみしき和歌の上手にて、心にくき人にいはれ給ひしほとにうせ給ひき、又たゝ今の左衛門督きん(公信)のふの卿、又法住寺の僧都(尊覚)のきみ、あさり(良光)の君おはす、まことに一條攝政殿の御むすめのはらの女君たち、三四五の御方おはしします、三の御方は、たか(雅信)つかさとのゝうへとて、尼になりておはします、四の御方は、いまの入道殿のそくにおはしましゝおりの御子うみてうせ給ひにき、五君は今の皇后宮にさふらはせたまふ、このおとゝの御ありさまかくなり、たゝし法住寺をそいとゝいかめしうをきてさせ給へる、攝政關白せさせ給はぬ人の御しわさにてはいとまうなりし、このおとゝいとやんごとなくおはしましゝかと、御末ほとそくそ、

〈大鏡〉五太政大臣伊尹のおとゝ、つき〳〵の女君二人は、法住寺大臣の北方にて、うちつゝきうせ給ひにき、

〈勅撰作者部類〉自帝王至庶人之部　法住寺太政大臣從一位爲光、恒徳公、九條藤原師輔男、拾遺集雜春、後拾遺集雜一、千載集雜中、新古今集秋上、

〈萬代和歌集作者部類〉恒徳公　秋上、一、

〈和歌色葉集〉上拾遺　六名譽歌仙者　大臣十三人

法住寺太政大臣爲光、恒徳公、同(輔親)九男、

〈記錄異同考〉ホ部之史　法住寺相國記　外合一冊

正暦二年九月任大臣ノ記、

法住寺相國爲光記　柳原伯爵家本大褨部類、

前ノ書ト同ジ、

法住寺相國爲光記　續群書類從九百六十七、任大臣大褨部類、

前ノ書ト同ジ、

〔二中歴〕十名家歴　一條院一條南、大宮東二町、謙徳公家、又爲光公家、

〔拾遺和歌集〕十八雜賀　冷泉院の五六(爲尊敦道)のみこ、はかまき侍けるころ、いひをこせて侍ける、　左大臣

岩のうへの松にだとへんきみ〳〵は世にまれらなるたねそと思へは

〔後拾遺和歌集〕十九雜五　一條攝政(伊尹)かくれ侍て後、少將義孝、子うませて侍ける七夜に、昔を思ひ出てよみ侍ける、　法住寺太政大臣

ちゝにつけおもひそいつるむかしをはのとけかれともきみそいはまし

〔萬代和歌集〕二春歌下　清慎(實頼)公の月輪寺にまかりて、花見侍けるに、　恒徳公

花の色をあかてやけふはかへりなん人たのめなる風にまかせて

〔千載和歌集〕十七雜歌中　前大納言公任、長谷といふ所にこもりゐける時、つかはしける、　法住寺入道前太政大臣

谷の戸をとちやはてつる鶯のまつにをとせて春のくれぬる

○爲光、法住寺ヲ供養スルコト、永延二年三月二十六日ノ條ニ、兼家ノ第ノ一種物合ニ會スルコト、正暦元年七月二日ノ條ニ、爲光ノ封百戸ヲ法住寺ニ施入スルコト、本月八日ノ條ニ、薨去ニ依リテ、固關解陣ヲ行フコト、本年七月二十四日ノ條ニ見ユ、

十七日、己卯、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕一條院　六月十一日、癸酉、依内膳司馬斃穢、月次、神今食延引、仍有大祓、

十七日、己卯、神今食、又月次祭、

〔吉記〕壽永二年六月十一日、甲辰、○中略

月次祭事大臣上卿事　月次祭、上卿内大臣實定公、相府被示送云、○中略正暦三年六月月次、右大臣重信、此外代斷了歟、於身者最吉例也、○下略

穢ニ依リ延引

大祓

上卿重信

七月大盡壬辰朔

四日、乙未、廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕一條院　七月四日、乙未、廣瀨、龍田祭、

五日、丙申、大祓、

〔日本紀略〕一條院　七月五日、丙申、於八省院東廊大祓、

八省院東廊ニテ行フ

八日、己亥、內供奉十禪師深覺ヲ東大寺別當ニ補ス、

〔東大寺別當次第〕五十二　內供奉十禪師深覺　正暦三年七月八日官符、年卅八、(五カ)廿九、眞言宗、奝然替、寬忠僧都資、九條右丞相息、(師輔)

〔正倉院文書〕東南院文書一櫃第二卷

太政官牒　東大寺

應補任別當法橋上人位奝然替事

奝然ノ替

內供奉十禪師傳燈大法師位深覺、年卅八、(薦)廿五、眞言宗、專寺、

右左大臣宣、奉勅、件深覺宜補任別當職者、寺宜承知、依宣行之、牒到准狀、故牒、

正暦三年七月八日　正五位下行左大史多米朝臣「國平」(自署下同ジ)牒、

正五位下守右中辨兼行太皇大后宮權高(亮)「源朝臣」(俊賢)

奉行　同年八月十日

別當法橋上人位「奝然」(自署下同ジ)　都維那法師「[illegible]」

權別當大法師「[illegible]」

少別當威儀師

權上座威儀師「[illegible]」

上座威儀師「[illegible]」

寺主大法師「[illegible]」○東大寺別當譜同ジ、本書、太政官印五顆ヲ踏ス、

○東大寺要錄、東大寺具書異事ナシ、

十二日、癸卯、仁王會、

〔日本紀略〕一條院　七月十二日、癸卯、仁王會、

十七日、戊申、從三位藤原在國ヲ本位ニ復ス、

〔日本紀略〕一條院　七月十七日、戊申、復從三位藤原朝臣在國本位、

〔公卿補任〕六　非參議從三位藤在國　八月日復本位、

○在國除名ノコト、二年二月二日ノ條ニ見ユ、

二十一日、壬子、諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　七月廿一日、壬子、奉幣諸社、

二十四日、乙卯、開關解陣、

〔日本紀略〕一條院　七月廿四日、乙卯、開關解陣、

〔權記〕七月廿四日、乙卯、有解陣事云々、先是依故大相國（爲光）事警固、今日解也、

〔小右記目錄〕二十一公卿薨卒事　同年同月（正暦三年七月）廿四日、解陣事、

二十七日、戊午、相撲召合、

〔權記〕七月廿七日、戊午、相撲召合、

廿八日、己未、拔出、無音樂、依大相國（爲光）事也、

二十八日、己未、攝政道隆、興福寺ニ黃金十兩ヲ納メ、光明朱砂十兩ヲ徵ス、

〔朝野群載〕七攝籙家奉納興福寺寶物牒

攝政家牒　興福寺

欲被納置黃金十兩、出送光明朱砂十兩狀

牒、件光明朱砂、合練紅雪（雲イ）、爲令救療百痾也、方今傳丹沙於仙方者、少於麟角、侵霧露於俗界者、多自牛毛、是故敎彼三代良醫之家、繼此一朝欲絕之藥而已、仍牒送如件、乞察之、欲被相替事爲舊風、非取（敢イ）新慶、今勤事情、以牒、

令大中臣朝臣
別當前紀伊守藤原朝臣
散位橘朝臣
左大史多米朝臣

爲光ノ薨去ニ依リ警固ス

拔出爲光ノ薨去ニ依リテ音樂ナシ

絕エントスル藥方ヲ繼グ

正暦三年七月廿八日

八月小　盡　壬戌朔

三日、甲子、復任除目、

〔日本紀略〕一院　八月三日、甲子、復任除目、

〔公卿補任〕六　参議正四位下藤誠信、二十九、六月服解、八月復任、

六日、丁卯、釋奠、

〔日本紀略〕一院　八月六日、丁卯、釋奠、

七日、戊辰、内論義、

十一日、壬申、定考、

〔日本紀略〕一院　八月十一日、壬申、定考、

〔百練抄〕四　一條天皇　八月、定考、上卿依輕服、穩座退出事、見小右記、

十三日、甲戌、檢非違使廳政、

〔石清水文書〕五　田中家文書　宮寺縁事抄　神事次第　放生會　放生會以前使廳政事

正暦三年八月十三日、於右廳有被相定、佐竿卿（マヽ）御馬洗、

二十八日、己丑、除目、

〔公卿補任〕六

内論義

穩座

右廳

權大納言正三位源重光　八月廿八日上表辭之、但讓伊周卿云々、

從三位藤伊周　八月廿八日任、

權中納言藤道頼、二十八月廿八日兼右衞門督、

正三位源時中、五十、八月廿八日任、止右衞門督、

參議正四位下藤公任　□（八カ）月日任、〇職事補任、一代要記、竝二八月二十八日ニ作ル、

平惟仲、四十九、八月廿六（八カ）日任、右大辨如元、

〔公卿補任〕六　正暦五年　參議正四位下源扶義　同三（正暦）八廿八内藏頭、

非參議從三位藤隆家　同三（正暦）八廿八左少將、

〔公卿補任〕六　寛弘元年　參議正四位下藤正光、四十八、同三（正暦）八廿八左中將、

〔公卿補任〕六　寛弘六年　參議正四位下源頼定、卅三、正暦三八廿八彈正大弼、

〔公卿補任〕六　寛弘八年　參議從四位下藤通任、三十九、正暦三八廿八左（右イ）兵衞權佐、

〔職事補任〕一條院藏人頭　右中辨正五位下源俊賢　正暦三八廿八補、太皇大后宮權亮、〇公卿補任同ジ、

藏人頭

〔職事補任〕一條院五位藏人　右近少將從五位上藤登朝　正暦三八廿八補、

〔中古歌仙三十六人傳〕高遠卿　正暦三年八月廿三(八カ)日任兵部卿、

〔日本紀略〕一條院　八月廿七日、戊子、除目、

廿八日、(己丑脱カ)同、

〔權記〕八月廿八日、己丑、大納言正三位源重光(朱雀)年七十、辭所帶(權脱カ)大納言職、讓聟納言伊周、任權大納言、年十九、

〔小右記目錄〕五京官除目事　同九月一日、除目清書事、

同(正暦三年)八月廿九日、除目事、

同日、下名事、

〔敍位除目執筆抄〕正暦三年四(八)月廿七日、京官、廿八日入眼、執筆

〔古事談〕二臣節　俊賢爲五位藏人之時、中關(道隆)白被問云、誰人補頭爲公家可有忠節哉、俊賢答云、無過於俊賢者、仍爲五位頭、今度齊信得理、自必存可補之由參內、於明義門下會俊賢、可被補頭云々、誰人哉云々、答曰、俊賢也云々、齊信赭面退歸畢、○下略

清書
下名
執筆
道隆俊賢ニ藏人頭ヲ後任チ問フ俊賢自薦ス

九月大辛卯朔盡

三日、癸巳、御燈、

〔日本紀略〕一條院　九月三日、癸巳、御燈、

九日、己亥、重陽宴、

〔日本紀略〕一條院　九月九日、己亥、重陽宴、天皇出御南殿、

〔百練抄〕四一條天皇　九月九日、重陽宴、有探韻事、

〔權記〕九月九日、己亥、有節會、參內、式部雖載文人廻文、○以下脱アラン、

〔本朝文粹〕六奏狀申官爵中　請特蒙鴻慈、因准先例、兼任辨官、左右衞門權佐、大江匡衡

學頭等、申佗官替狀

南殿ニ出御探韻

匡衡宴ニ侍ス

○中略　去秋遇重陽之宴、誇文道之巳興、○中略

正暦四年正月十一日　從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

在國宴ニ陪ス述懷ノ詩

〔本朝麗藻〕下述懷部　除名之後、初復三品、重陽之日、得倍(陪カ)宴席、情感所催、欲罷不能、聊述鄙懷、呈諸知己、

勘解(藤原在國)相公

我是柴荊貶謫人、豈圖徵召列文賓、除名二月花開日、待詔重陽菊綻辰、籬落不

朝光奉行

中宮ノ外祖タルニ依ル

要陶隱醉、蘭叢應笑楚臣紉、忽抛野服染愁涙、更著朝衣賁老身、遄死空爲黃壤骨、愁生再踏紫震塵、半焦桐尾雖殘燼、已朽松心免作薪、籠鶴放雲振泥翅、轍魚得水潤枯鱗、鬢斑蘇武初歸漢、舌在張儀遂入秦、運任秋蓬風處轉、榮同朝菌露中新、抽簪將學空門法、未報皇恩未解紳、

十一日、辛丑、例幣、

〔日本紀略〕一條院　九月十一日、辛丑、例幣、

〔平記〕十五時信記　天承元年九月二日、乙未、今日止雨奉幣也、○中略

正暦(三)一年九月、朝光卿除前(爲光)太政大臣服、行例幣事、

十七日、丁未、從二位讃岐權守高階成忠ノ眞人ノ姓ヲ改メテ、朝臣ト爲ス、

〔日本紀略〕一條院　九月十七日、丁未、改從二位讃岐權守高階眞人成忠姓爲朝臣、依中宮外祖也、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　七月十日(正暦二年)、勅曰、高階眞人成忠、○中略後日改眞人爲朝臣、○歷代編年集成同ジ、

〔公卿補任〕六正暦二年　非參議從三位高成忠　九月日改眞人爲朝臣、

〔一代要記〕一條院非參議　從三位高成忠　正暦三年九月十七日、改眞人爲朝臣、

秋月莊

五十餘年入檢ナシ

依皇后外祖也、

○公卿補任、正暦二年ニ作ル、今日本紀略、一代要記ニ據ル、成忠出家ノコト、十月十一日ノ條ニ見ユ、

二十日、庚戌、大宰府、筑前ヲシテ、檢田使ノ筥崎宮塔院領ニ入勘スルヲ制止セシム、

〔石清水文書〕二田中家文書　筥崎宮塔院所領官符

太宰府符　筑前國司

應下知在地郡、依例令制止檢田使、入勘筥埼宮塔院所領秋月□□(庄事)

在夜須下座兩郡部下北山中、

右得彼院牒偁、件庄元是空閑之地、無有本田(主カ)、去□□(天慶カ)元年以來、五十餘年、件庄立之後、更無入檢、然則舊跡至□□入無例、自今已後、從今年秋、遠停亂入、庄家之人雖□大煩、爲國無益、望請府裁、被下知當國、令制止件非□(例カ)事、佛塔之中、鎭吹三昧之法音者、所仰如件、國宜承□□(知下カ)知在地郡、依例令制止入勘彼庄內、符到奉行、

正三位皇后宮權大夫兼大貳藤原朝臣(佐理)(花押)　正六位上行小典秦宿禰(花押)

正暦三年九月廿日

奉行（別筆）

少貳兼大介藤原朝臣（花押）

二十七日、丁巳、故攝政伊尹ノ室從四位上惠子女王卒ス、

〔小右記目錄〕二十一 庶人卒事 同（正暦）三年九月廿七日、故一條（伊尹）攝政北方惠子女王逝去事、

〔本朝皇胤紹運錄〕

醍醐天皇——代明親王——

惠子女王 從二位太政大臣伊尹公室、

〔尊卑分脈〕藤氏北家 伊尹孫

伊尹

世系

子女

親賢 右兵衛佐、正五下、母三品代明親王女、從四位上惠子女王、

惟賢 右兵衛尉、從五下、母同親賢、

五藏 舉賢 正五下、左少將、母同上、

頭 義孝 春宮亮、從五下、右少將、母同上、

頭 義懷 從二、權中納言 母同上、

女子 懷子、花山院御母儀、母惠子女王、代明親王女、

○女王、二子舉賢、義孝ノ卒去ヲ悼ムコト、天延二年九月十六日ノ條ニ、封戸及ビ年官年爵ヲ賜ハルコト、永觀二年十二月一日ノ條ニ見ユ、

二十八日、戊午、季御讀經、

〔日本紀略〕一條院 九月廿八日、戊午、季御讀經始、十月一日、辛酉、今日季御讀經終、

〔小右記目錄〕四 季御讀經事 「同（朱書）九月廿八日、秋季讀經事」（正暦三年）

結願

十月小盡辛酉朔

一日、辛酉、旬、

〔日本紀略〕一條院　十月一日、辛酉、旬事、天皇出御南殿、

南殿ニ出御

十日、庚午、興福寺維摩會、

〔維摩會講師研學竪義次第〕（正暦）三年壬辰、講師清範年卅一、（朱書）「去年十月十七日（四イ）宣、廿日請、」　播磨國人、

講師清範

大和氏守朝已講弟子、勅使俗別當、　研學定算年卅三、（二イ）萬、眞喜僧正弟子、　法相宗、興福寺、副　泉溫年五十二、萬卅六、慶祐已講弟子、

〔三會定一記〕一　同（正暦）三年　去年十一月十四日、　講師清範三十一　興福寺、法相宗、　竪義定算、卅二、泉溫、

次豐秋、

〔僧綱補任〕三　○興福寺本　同（正暦）三年壬辰、　講師清範　法相宗、興福寺、二年十月十七日宣旨、（朱書）「卅一」　竪者定算（朱書）「卅二」興、　覺緣東、（朱書）「豐秋」

弓場始、

〔日本紀略〕一條院　十月十日、庚午、弓場始、

十一日、辛未、從二位讃岐權守高階成忠出家ス、

〔日本紀略〕一條院　十月十一日、辛未、從二位行讃岐權守高階朝臣成忠出家、

法名道觀

年七十、法名道觀、

〔公卿補任〕六　正暦二年　非參議從三位高成忠　十月十一日出家、道觀、

〔一代要記〕一條院　非參議　從三位高成忠　七月（十カ）十一日出家、法名道觀、年七十、

○公卿補任、正暦二年ニ作ル、今、日本紀略ニ據ル

十四日、甲戌、前權大納言源重光ニ、職封ヲ賜フ、

〔日本紀略〕一條院　十月十四日、甲戌、前權大納言源重光朝臣、准致仕賜職封、

○重光、權大納言ヲ辭スルコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、

致仕ニ准ズ

檢非違使別當、尉以下ノ、恣ニ看督長ヲ勘事ニ處シ、或ハ京外ニ差遣シ、若クハ隨身スルコトヲ禁ズ、

〔政事要略〕六十一　糺彈雜事一　檢非違使雜事上

別當宣偁、尉以下官人、差遣看督長於京外、及處勘事、幷隨身向城外之事、皆是觸佐、隨其許容所行也、而如聞、日（月イ）來件官人等、不觸事由、恣差遣遠所、處勘事、及隨身向城外、是尤不可然、已有舊制、何乖往規、自今以後、依昔例行之、任意不得進退者、

正暦三年十月十四日　右少辨兼右衞門權佐東宮學士周防權守高階朝臣信順奉

二十日、庚辰、宇佐使發遣、

使源宣方

〔日本紀略〕一條院　十月廿日、庚辰、奉遣宇佐使左近權中將源朝臣宣方、

二十三日、癸未、攝政道隆、法興院ニ於テ、法華經一千部ヲ供養ス、

左右大臣以下參向

饗祿

〔日本紀略〕一條院　十月廿三日、癸未、攝政於法興院、被供養法華經一千部、左(雅信、重信)右大臣、內(道兼)大臣以下向彼院、有饗祿事、

二十六日、丙戌、清涼殿ニ於テ、臨時樂ヲ御覽アラセラル、

舞人

〔日本紀略〕一條院　十月廿六日、丙戌、於清涼殿、有臨時樂、天皇出御、御覽之、舞人左兵衞尉大友兼時還任左衞門尉、右衞門小志秦身高任尉、同府生多吉義○續古事談、好茂ニ作ル、任左兵衞尉也、

勸賞

〔續古事談〕五諸道　一條院御時、清涼殿ニテ、臨時樂キコシメシケルニ、舞人身高、兼時、好茂トリ〳〵ニイミシカリケレハ、ヲノ〳〵賞カウフリケリ、一度ニ三人マテ勸賞、アマリナリト人オモヘリケレトモ、イツレモヲトラサリケルナルヘシ、樂ノ行事ニテ備前前司相(源)方朝臣、御前ノ庭ニ召テ祿タマヒケリ、此日文(藤原)範ノ民部卿八十ニアマリテ、サセルメシナキニ參テ座ニサフラヒテ、舞ノホトニウソフキケレハ、主上ヨリハシメテミル人、ヲトカイヲトカスト云事ナシ、老クルヒトナム云アヘリケル、

行事

文範召ナキニ參會ス

二十八日、戊子、紀伊追捕使ヲ補ス、

〔類聚符宣抄〕七追捕使

太政官符　紀伊國司

應以前土左掾正六位上御春朝臣聰高、補任追捕使事

右得彼國去年十一月廿八日解狀偁、謹檢案內、此間山海之間、寇賊聯綿、姧類伺隙、爰爲追捕使之者、雖有其數、或據鞍之力難堪、或汗馬之勞失便、今件聰高、夙傳弓馬之能、尤足警急之備、望請官裁、早被補任件職、將爲扞城之便者、正三位行中納言源朝臣保光宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左(信順)少辨　右少史

正暦三年十月廿八日

大皇太后
宮
皇后宮
中宮

中院ニ出
御

十一月大庚寅朔

五日、甲午、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、
〔日本紀略〕一院　十一月五日、甲午、於八省院、奉幣伊勢以下諸社、

七日、丙申、平野祭、
〔日本紀略〕一院　十一月七日、丙申、平野祭、

八日、丁酉、梅宮祭、
〔日本紀略〕一院　十一月八日、丁酉、梅宮祭、

十二日、辛丑、園、韓神祭、
〔日本紀略〕一院　十一月十二日、辛丑、園韓神祭、

十三日、壬寅、鎮魂祭、
〔日本紀略〕一院　十一月十三日、壬寅、鎮魂祭、太(昌子)皇大后宮、皇(遵子)后宮、中宮(定子)同之、

十四日、癸卯、新嘗祭、
〔日本紀略〕一院　十一月十四日、癸卯、新嘗祭、天皇(一)御幸中院、

十五日、甲辰、豊明節會、
〔日本紀略〕一院　十一月十五日、甲辰、節會、

神祇官御
卜

十六日、乙巳、東宮鎮魂祭、
〔日本紀略〕一院　十一月十六日、乙巳、東宮鎮魂祭、

十九日、戊申、吉田祭、
〔日本紀略〕一院　十一月十九日、戊申、吉田祭、

二十日、己酉、賀茂臨時祭、
〔日本紀略〕一院　十一月廿日、己酉、賀茂臨時祭、

二十六日、乙卯、強盜、齋院ニ入ルニ依リテ、賀茂社ニ奉幣ス、
〔日本紀略〕一院　十一月五日、甲午、〇(略)中去夜強盜亂入齋院、仍諸卿參彼院、
九日、戊戌、召神祇官有御卜、去四日齋院強盜事、
廿六日、乙卯、奉遣幣使於賀茂社、被申齋院強盜事也、
〔賀茂齋院記〕選子内親王　正暦三年十一月五日、強盜入齋院、依是諸卿參彼院、二十六日、遣幣使于賀茂社、

二十七日、丙辰、中宮、新造ノ二條第ニ遷御シ給フ、
〔日本紀略〕一院　十一月廿七日、丙申(辰)、〇(略)中今日中宮(定子)自内裏遷御新造二條院、

〔百練抄〕四一條天皇　十一月廿七日、中宮定子遷座新造二條第、

〔伏見宮御記錄〕利四十八諸院宮御移徙部類記上

「正暦三十一廿七」（朱書）

二條殿「中宮」（朱書）　小右記〇中略

御巡路　入御　饗饌　打攤祿

正暦三年十一月廿七日、丙辰、晩景參內、中宮亥刻遷給新宮、二條、經玄暉、朔平、上東等門、自大宮大路南行、自待賢門折東、院（自脫カ）西大路折南、自二條大路更折東、入御、自新宮西門內列立、黃中贄水童二人步立、其外物等皆如例、御輿寄南階、予、上達部各謁攝政、乘車被候御輿後、於西對有公卿殿上人饗饌、攝政出居、數盃之後、打攤、以紙爲贈物、公卿以下給祿有差、公卿大褂、衞府公卿帶弓箭、右衞門督道賴獨不帶弓箭、問其由、答無弓箭之由、但不騎馬、爲奇云々、

〇中宮入內ノコト、十二月七日ノ條ニ見ユ、

十二月大盡庚申朔

二日、辛酉、阿波海賊追討使源忠良ノ獻ゼシ賊首ヲ梟シ、降人ヲ獄ニ投ズ、

〔日本紀略〕一條院　十一月卅日、己未、阿波國海賊追討使從五位下源忠良、梟海賊首十六人、降人廿餘人、

十二月二日、辛酉、海賊追討使忠良所斬賊首、日來置東獄門前、而依宣旨、首十六遣東西市司、降人廿人分給左右獄了、

五日、甲子、諸卿定申源忠良勸賞事、卽解却阿波守藤原朝臣嘉時、以件忠良任之、件嘉時爲海賊被虜掠云々、

勸賞　敍位

七日、丙寅、中宮、二條第ヨリ入內アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　十二月八日、丁卯、〇中略今日中宮（定子）從攝政第參內、

〔伏見宮御記錄〕利四十八諸院宮御移徙部類記上

「正暦三十一廿七」（朱書）

二條殿「中宮」（朱書）　小右記〇中略

十二月七日、丙寅、中宮還給內裏、權大納言、伊周、右衞門督道賴卿、攝政息、敍正三位、左中辨源扶義敍正四位下、宮亮、近江守橘忠望敍從四位上、造彼宮行事云々、無由、左近少

將隆家叙正五位下、（攝政子、）無位藤原頼子叙正四位下、（攝政姨、）此加階等未得其意、

〔公卿補任〕（六）　權大納言從三位藤伊周　十二月七日正三位、今日中宮遷行二條新宮賞也、

權中納言　藤道頼、二、十　十二月七日叙正三位、（臨時、）

〔公卿補任〕（六正暦五年）　參議正四位下源扶義　（正暦三年）十二月七日正四下、中宮（二カ）三條新宮渡御、以家司有此賞、

非參議從三位藤隆家　（正暦三年）十二月七正五下、中宮自二條宮還御賞、

○日本紀略、八日ニ作ル、今、公卿補任及ビ伏見宮御記錄所收小右記ニ據ル、中宮、二條第ニ遷御ノコト、十一月二十七日ノ條ニ見ユ、

八日丁卯、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕（一條院）　十二月八日、丁卯、發遣伊勢以下諸社奉幣使、

十一日、庚午、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕（一條院）　十二月十一日、庚午、月次、神今食、天皇幸中院、

〔權記〕　十二月十一日、庚午、出御中院云々、

中院ニ出御

十三日、壬申、興福寺ノ僧徒、攝政道隆ノ四十ノ算ヲ賀ス、

〔日本紀略〕（一條院）　十二月十三日、壬申、興福寺僧等、賀攝政卅算、

廿一日、庚辰、於法興院、賀攝政卅算、

○法興院ニ於テ、道隆ノ四十ノ算ヲ賀スルコト、便宜合叙ス、

十四日、癸酉、平野社ニ行幸シ給フ、

〔日本紀略〕（一條院）　十一月廿一日、庚戌、行幸平野社點地、

廿七日、丙申（長）、奉幣平野社、依今日行幸延引也、

十二月十四日、癸酉、行幸平野社、依在藩之御願也、

〔權記〕　十二月十四日、癸酉、平野行幸、右（道兼）大將不參、

十五日、甲戌、大僧正寛朝ニ輦車ヲ聽ス、

〔權記〕　十二月十五日、甲戌、大僧正寛朝被聽輦車、

二十日、己卯、勘解由次官藤原惟貞ヲ問頭ト爲シテ、藤原爲文ノ策ヲ問ハシメ、尋デ、內記藤原弘道ヲ問頭ト爲シテ、大江通直ノ策ヲ問ハシム、

〔桂林遺芳抄〕　省官故障之時用他儒例

文章得業生正六位上行大和權大掾藤原朝臣爲文誠惶誠恐謹言、

點地　延引ニ依リテ奉幣在藩ノ時ノ御願

右大將道兼不參

爲文ノ上狀

請特蒙天恩、因准先例、被下宣旨、以勘解由次官從五位下藤原朝臣惟貞爲問者、遂課試上狀

右爲文謹檢案內、式部大輔菅原朝臣相當問頭、而彼朝臣俄申障由、重檢故實、申請問者課試之輩、古今已多、近則件惟貞問弓削以言、菅原資忠問藤原惟成、橘直幹問藤原國光等是也、自餘之例不可勝計、是則依有道之大事年之定限也、望請蒙天恩、因准先例、被下宣旨、以件惟貞爲問頭、將遂課試、爲文誠惶誠恐謹言、

宣旨

正暦三年十二月八日　文章得業生正六位上行大和權大掾藤原朝臣爲文

中納言源朝臣保光宣、奉勅、宜令件惟貞問文章得業生藤原爲文之策者、

正暦三年十二月廿日　大外記兼博士主稅助播磨介中原朝臣致時奉

式部大錄和氣元倫奉

通直ノ上狀

依同房爲他儒例

文章得業生正六位上美作權大掾大江朝臣通直誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例、被下宣旨、以□內記藤原朝臣弘道爲問頭狀、

右謹檢案內、通直爲文可課試獻策之由、被下宣旨、而大輔菅原朝臣依有故障、不能□、少輔三善朝臣佐忠、巨勢爲時等皆是同坊也、仍爲文以勘解由次官藤原朝臣惟貞申請問頭、已蒙宣旨、方今通直雖適生累葉之家、纔應茂才之擧而已、過强仕之期、更迷揚曆之志、爲文已蒙優許、通直盍仰傍跡、望請天恩、因准傍例、以件弘道爲問頭、將遂對冊之業、通直誠惶誠恐謹言、

宣旨

正暦三年十二月十一日　文章得業生正六位上美作權大掾大江朝臣通直

中納言藤原朝臣顯光宣、奉勅、宜令件弘道問文章得業生大江通直之策者、

正暦三年十二月廿八日　權少外記三園——奉

使定

二十六日、乙酉、荷前、

〔日本紀略〕一條院　十二月十七日、丙子、定荷前使、

廿六日、乙酉、發遣荷前使、

出御

〔權記〕十二月廿六日、乙酉、御建禮門、有荷前事、左右大將不參、門前立幄爲御在所、前施幔、辰々(マヽ)方去數又(丈カ)幄爲上卿座、上卿座南末有諸大夫座、東有上官座、又東又(衍)東去三丈有外記史座、御在所南有班幣幄、宸儀出御承明門、兵衞陣左右、御出建禮門之比、各分春華、修明兩門夾班幣幄陣之、近衞御在所東西陣之、衞門者在兵衞南、今日不著靴、只帶弓箭、

是月、筑前安樂寺、天滿天神ノ託宣ヲ注進ス、

〔扶桑略記〕二十七 一條天皇上　十二月四日、安樂寺詫(託)宣云々、〇下略、託宣ヲ掲グ、下ノ天滿宮託宣記ニ同ジ、

〔百練抄〕四 一條天皇　十二月、安樂寺託宣、(忠平)貞信公流可爲執政臣事、

〔天滿宮託宣記〕正暦三季十二月四日御託宣

禰宜藤原長子ニ夢告

禰宜藤原長子、今月(日)早旦仁申云、依例天、昨夜御前仁候宿須、今曉寅時計乃夢中仁、廟君乃仰仁云、以汝傳仰倍木事有リ、不罷去天可候志、但我一兩日他行奈リ、其間御殿ハ不開天可候者、仍宮師淨洞法師爾仰爾(衍)天、如仰爾御殿を不開シ天、例御供御燈等ハ、戸外御簾乃前爾令奉供、同三日乃夜半計爾、雷公大鳴天、降雨如汝志、其間電光如日爾志天、雷乃響振地布、奇怪怖異不可勝計、然間爾御殿乃戸開ぬ、宮師等驚奇布、其後寅時計爾、禰宜長子託宣云、寺司等可召者、卽大宮司安倍近忠ヲ以天、御託宣乃旨ヲ令記牟、其仰爾、我家之末孫輔正朝臣乃大貳爾任セリシ時爾、公家爲令申爾、種々乃古事ヲ仰示志キ、是ハ吾心非一、山々乃隱者賢人等乃所申之事、幷爾封戸年分可被加木事等也、而左右爾思慮シ天、遂爾不奏聞、是ハ彼朝臣乃已不信なるなり、然而爲大貳志

長子ニ託宣

大宮司近忠託宣ノ旨ヲ記ス

大貳輔正ニ對スルモノ

右大辨惟仲ニ對スルモノ

時爾、我寺爾一基乃多寶塔ヲ造立天、千部乃法花經ヲ書寫シ天、安置供養セル、其善無量也、國土ヲ鎭護志、砂界ヲ利益寸、此に依天、彼朝臣乃不信不勘也、右大辨惟(平)仲朝臣ハ我家乃門生也、肥後國乃司と有志間爾、爲寺爾頓有用意、玉井名合志乃庄等事とも、其志有者(衍カ)モノナリ、又歸京乃時爾毛奉幣志、東舞等ヲ奉供セシ、尤有信心木、其後毛猶有其志、仍天有加護、此人乃作詩乃中爾、輔正朝臣乃寺別當松壽爾寄たり志八韻乃詩ノ和ハ、在厨子中リ、可求進志者、仍天忽爾分手天搜求出天、御前爾進留、卽令讀天聞食天、父子相分テ隔遙界たる詞尤可憐志、何況昔乃事ヲ有心良牟人ハ可相(想)像志、我常爾昔ヲ思仁、其心不安寸、抑先年爾所示乃隱者等乃所申ハ、昌泰三年乃事乃元首ハ、朱雀院乃行幸乃日事等奈利、左右兩大臣ヲ以テ、共爾時乃故(政)ヲ令知たり、世人乃云々(クイ)、定天有嗷(妨イ)々牟加、院與主上ト密議給天、一人ヲ欲止給志介リ、爰對面良久天、忽余ヲ召天、依召天、座ヲ立ハ、左大臣共爾立天出ツ、氣色ヲ見太留爾似たり、余ハ御前爾參せり、其事等被仰留、卽奏云、極天不便奈留事奈リ、不可然爾、其旨詳爾奏爾、猶上﨟ヲ可被用と奏畢、種々云々、仍卽詩題ヲ可進者、群臣爾被下天作文ヲ令進牟、召乃旨依是奈リと臣下仁令知畢、仍左大臣還參寸、

昌泰三年事件ノ元首

左遷ニ關スルモノ

然而彼事漏聞たり、依是天年内爾成謀天、明季爾遂左遷乃事有、天下騒動す、
左遷乃後爾、彼朝臣ハ獨身世乃政ヲ行テ、官外記の雑事、詔書、宣命、官符、宣旨、
毀舊天改正皆畢、其事爾同心乃人々等、幾乃程ヲ不經シテ、皆悉死亡志、子孫
各絶たり、適生は無益毛誰不知乎、我入滅乃後爾、清涼殿爾參シ天、帝皇爾對
面天、具古事ヲ奏する爾、合掌天涙ヲ流給天、彼時乃事ヲ被宣留、然而臣下爾
不令知す、依無皇威奈り、彼隱者等申、當國乃風を誰不知乎、官職乃生前爾不
任は、沒後爾贈之、延長元季乃詔云、左遷乃號ヲ停テ、爲本大臣爾、彼時乃文書
等皆悉爾可燒失志、若遺置加牟人ハ、違勅乃罪爾可處ト由等、其定明奈り、已
爲本大臣り、何無贈位乎、我か西行乃時爾、故貞信(忠平)公ハ右大辨爾天、深久我か
遠行を歎天、更爾兄(時平)乃大臣乃謀計爾不同ト、遞爾消息狀ヲ通天、專無隔心ト、
彼卿と我と遂慇懃を結ヒ木、彼家乃子孫ハ、攝政不斷天、多久朝家爾滿たり、
故入道(師輔)攝政乃北野宮社爾被過たり志、甚所悦奈り、爲我有志留輩ヲ何不守
護哉、我朝ヲ保護給事ハ、是八幡大菩薩乃助給奈り、天下和平、神威繁多志、末
世乃事皆能可愼、我禮毎日三度比帝釋天爾參詣天愁訴乃後、頗自在乃身を
得たり、我心爾所思ヲ、帝釋天暗爾知給布、我か昔名ヲ損せ志時爾、心中爾五

師輔ノ北野參詣ヲ悦フ

忠平ノ同情ヲ謝ス

日ニ三度帝釋天ニ參詣シテ自在ノ身ヲ得タリ

述懐ノ詩ヲ示ス

一切經論ノ書寫ヲ願フ

言絶句ヲ思ト、離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼ヲ、此句口外
爾未出爾、帝釋天知之、忽以感歎志、後集乃中仁載天有り、頗可憐ト詩奈利、大
唐乃人皆暗爾誦留事有り、我今懷一絶句天、寺僧等爾示す、家門一閇幾風煙、
筆硯抛來九十年、我仰蒼天(仰陳イ)懷古事、朝々暮々涙連々、寺僧等奉之、有感拭涙、又
一切經論欲令書寫爾、道心乃人に難會志、我家末葉乃此願ヲ可遂ト木、人忽以
難有志、向後仁必出來歟、我致助成之、某朝臣下向セリシ時ニハ、他乃善事ヲ
先營志間爾、任秩已暮テ不成爾木、然而彼朝臣大貳乃有闕ヲ時爾、必望ヲ可
成ト木由ヲ可告示者奈り、寺僧等毛此心ヲ可存志、又此寺仁所申請乃條々乃
雜事言上、府解文等、入道(從家)攝政乃時爾、在國朝臣爾付タり、而其心爾不入シテ
已捨失り、大不足言奈り、自爾天譴爾毛當留、是不信乃所致奈り、又管國乃司
等乃所愁歎ハ、毎年爾絹米等可加進ト事奈り、各所訴奈り、府國乃煩只此事
爾可有志者、御託宣乃旨如此、仍注記、

大宮司安倍近忠
宮師法師淨洞
都維那法師

此一通、又大甫殿御自筆也、

○十訓抄、體源抄、異事ナキヲ以テ略ス、

寺主大法師聖運
上座大法師王廉
撿挍大法師昇朝
別當大法師住算
座主大法師松壽

是歳、皇后宮權大夫藤原佐理ヲ正三位ニ敍ス、

〔公卿補任〕六 前參議從三位藤佐理、四、九、十 太宰大貳、皇后宮權大夫、月日正三位、

外宮禰宜

春日社常住神主

春日權現ノ夢告

年末雜載

神社、

〔二宮禰宜補任至要集〕四十九 外宮一禰宜次第　安兼　長官六年、禰宜廿五年、正暦三年閏七月、目盲之間、廣隣訴被止執印、尙禰宜帶之、○內外二宮御祓銘論記同ジ、

〔中臣社司補任〕春日社大中臣祠官補任次第　理平孫僧基應一男　爲元　正暦三年壬辰、十一月日、依祭禮祝勞、始補任常住神主、中關白殿道隆、御代、自神護慶雲二年、戊申、迄常年、壬辰、二百廿五年也、

〔春日權現驗記〕一　一條　正暦三年のころ、藤原吉兼か夢に、家の西南の竹林のうへに、貴女飛來ての給やう、我は汝か氏□(神カ)春日大明神也、家たかく竹しけくして、竹林園に似たるゆへに、この所に來宿す、もし竹しけくさかりならは、汝か子孫繁昌すへしと被仰と見けり、やかて社をたて、神をあかめたてまつりて、なかく神竹をきるへからさるよし、起請をかきけり、いまに修竹いよ〳〵か□して、梁園にことならすとなん、○繪略ス、

佛寺、

〔南都七大寺巡禮記〕上　興福寺　大和國添上郡平城左京三條七坊、○中略

菩提院事

朝勳菩提院法華八講ヲ始ム

横川如法堂ニ十禪師撿挍ヲ置ク

盜東大寺千手院ニ入ル

本堂阿彌陀、長和二年三月廿四日、觀音出現以後、號觀音堂、又自四月十八日至五月二日、修三十講、朝勳上人修始之、自正暦三年始之也、本者八講也云々、

〔門葉記〕四十一 如法經濫觴類聚記　根本如法堂事○中略

正暦三年八月十日、置十禪師撿挍一口、以修理料封戸內、充給供養料、官符下、依座主大僧都暹賀奏也、

〔東大寺別當次第〕五十二　內供奉十禪師深覺　(正暦三年)八月廿三日、千手院銀佛盜穿所々、別當前後司所司五師、共檢錄之間、前別當法(資然)橋稱從童部手傳得、被出銀三分三銖、○正倉院文書、二分三銖ニ作ル、

〔正倉院文書〕東南院文書五櫃第十八卷

正暦三年八月廿三日、千手堂銀佛、盜穿所々、前司新司所司五師共檢錄之間、前別當法橋稱件佛盜散之銀、從童部手傳得所被出之銀切、重二分三銖、令量定之處、件銀既有加減、仍爲後記之、

合貳拾量(兩)內不足三兩

漆拾兩之內一枚卅八兩剩一兩

伊豫國東大寺領ノ封物進米ヲ勘申ス

已上權上座念秀所進量定、

別當僧都（自署下同ジ）深覺」　都維那從儀師「聖好」

上座威儀師「慶喜」　都維那法師「慶壽」

權上座大法師「壽」

寺主大法師

權寺主大法師

〔正倉院文書〕東南院文書二櫃第一卷

東大寺　公文所　案文

勘申伊豫國去正暦三年封物進米事、

調絹二百四疋五丈二尺五寸　代米四百九石七斗四升四合

足別二石、永延二年官符、

庸米百五十三石三斗　代米七石八斗七升五合□

中男作物油五斗二升五合　代米六石

帋三千張

租米二百六十六石八斗二升七合

還著人ノ座次ニ付キテノ質疑

仕丁八人

養米卅石

前分料准米廿五石二斗九升五合　代米十六石四斗

絹前分八疋一丈二尺

庸米前分七石六斗六升五合

油前分六斗三升

帋前分六斗

已上都合准米九百九石四升一合

度々所進八百十五石四斗九升八合四勺

未濟九十三石五斗四升二合六勺

法制、

〔法曹類林〕二百　公務八二　座次

假令甲出仕之勞經廿五、今年任外國二分、而不赴任國、卽蒙卿宣、還著本所、其宣旨偁、如舊爲番頭史生、聽其本座者、爰甲蒙件宣旨、請奉行、還著之後、申之（甲カ）下臈末座者爭論云、至于還著之人、雖本爲上臈、猶宜降其座次爲末座者、甲答云、

散位伴保正問　正暦三年二月廿八日、

答

惟宗允亮姉妹ノ子ノ服ニツキ勘申ス

六位以下依齒爲次、況甲座之間、爲第二長者、況宣旨之所指、如舊聽本座者、乙等區々之未進、何恣可成件論哉、今甲之所陳、乙之所論、誰得其理乎、將依法意以決爭論、謹問、

答、公式令云、文武職事散官朝參行立、各依位次爲序、位同者、六位以下以齒、式云、行列次第、六位以下次以位階、不依官秩、其申政之時、以官秩、職員令云、神祇官、伯一人掌惣判官事、餘長官判事准此者、六位以下同階之者、不依官秩、次以年齒、況至于同職、不可有異論、而如問狀、申(甲カ)出仕勞廿五年、任外國二分、不赴任國、蒙(卿カ)鄕宣、還著本所矣、其宣旨偁、如舊爲番頭史生、聽本座者、請奉行、還著之後、下﨟末座乙等論云、還著之人、雖本上﨟、宜降座次猶爲末座者、甲答云、六位以下依齒爲次、又爲第二之長老、蒙聽本座之宣旨者、凡厥諸司之政、須請官之判也、何乖卿宣、妄致私論乎、甲之所陳自叶章條、乙之所執似無道理也、

〔小野宮年中行事〕

五等親姉妹之子無服仍勘申

儀制令曰、凡五等親者、父母、養父母、夫、子爲一等、(義云、養子亦同、)祖父母、嫡母、繼母、伯叔父、姑、兄弟姉妹、夫之父母、妻妾、姪孫、子婦爲二等、(義云、妾亦同、子妾尙爲二等、)曾祖父母、(義云、祖父母之父母也、)伯叔婦、夫姪、從父兄弟姉妹、異父兄弟姉妹、夫之祖父母、夫之伯叔姑、姪婦繼父、同居夫前妻妾子爲三等、(義云、今妻妾子又同也、夫姪爲三等、夫兄弟爲四等、謂伯叔之妻、爲母夫之姪爲子、又兄弟之子猶子引而進之、卽此義也、從父兄謂兄弟之子、相呼爲從父、長者曰兄、少者曰弟也、)高祖父母、從祖父姑、(義云、祖父之兄弟姉妹也、)從祖伯叔父姑、(義云、從祖父之子、卽父之從父兄弟姉妹也、)夫兄弟姉妹、兄弟妻妾、再從兄弟、(義云、從祖伯叔父之子也、)姉妹、外祖父母、舅姨、(義云、母之兄弟曰舅、姉妹曰姨、)兄弟孫、從父兄弟子、外甥曾孫、々婦妾、妻前夫子爲四等、妻妾父母、姑子、舅子、姨子、玄孫、女聟爲五等、注進從父兄弟事、謹案、件事猶可依文、先儒之說又復如此、

正暦三年六月廿三日　勘解由次官惟宗允亮

入道民部少輔女死ス

熊野別當殊勝寂ス

比丘尼釋妙寂ス

生死、

〔權記〕六月九日、辛未、(○中略)入道民部少輔女(第一女カ)第一、昨午時許、長逝之由被送(脫アラン)、(○下略)

〔熊野早玉神社文書〕三熊野別當代々次第　第九別當殊勝

圓融院御時、康保二年十一月十日補任、女子一人、治山廿八年、正暦三年九月四日入滅、增慶五男也、(○熊野別當次第異事ナシ、)

〔本朝法華驗記〕下　第九十九比丘尼釋妙

比丘尼釋妙、睿桓聖人母也、其心潔白、慈悲甚深、細守戒律、不犯微塵、以不淨手不取水瓶、不著袈裟不出佛前、何況誤犯其餘衆罪哉、出家以後、向西方不行大小便利、頭東足西更不臥息、讀誦法華、稱念彌陀、日夜經營、動止所作、讀法華經三千餘部、百萬遍念佛數百度也、定途夢想、木像佛未開口動舌言、我是彌陀、爲引攝汝、常來守護、臨遷化時、手取五色糸、一心念佛、正暦三年、端座入滅矣、○拾遺往生傳、今昔物語、元亨釋書異事ナシ、

八省院ニ出御

奏賀還御

正暦四年癸巳

正月小盡 庚寅朔

一日、庚寅、朝賀、節會、

〔日本紀略〕一條院 正月一日、庚寅、於八省院有朝拜事、天皇出御、還御之後、宴會如恒、內辨內大臣(道兼)、

〔權記〕正月一日、庚寅、今日朝拜、巳時自待賢門參入、卯時行幸八省院云々、仍便自此門參也、裝束、無文冠、綾袍、折色(柳カ)、色(衍カ)下襲、白表袴、烏犀巡方帶、塵蒔細劔、青綾平緒、依故東院御服也、入東廊便所、裝束、左衞門督顯光御宿所、著武禮冠、裲襠、深緋襖等、右衞門權佐信順(高階)、用尋常冠、卷纓、此事無所見、又或著半臂下重、或不著、至于下官者、半臂不可著之事、更無所見、至于親衞將、著冑刑(甲則カ)用例冠等、著平胡籙、府陣如式、夾龍尾階左右可陣也、而不知前之宮人(例脫カ)(宮カ)、偏陣階東、不陣西、依有立改幡等之煩、只今(令カ)立戈召渡官人等、相分令著陣、但右(重信)府不知前例、偏陣階西、女院、立御車於白虎樓下、怪事也、內辨右相府、六條、威儀、彈正尹爲尊親王、宰相中將道綱、奏賀、中宮大夫道(長)、了還宮、奏鎰、左少將隆家少納言代、於便所脫改裝束、節會事內辨、內相府(道兼)、事未了出給、候御車後、

〔三節會次第〕元日節會次第 節會雜例 大舍人不參例 西宮云、以召使爲代官、○中略

管絃
御笛ヲ吹キ給フ
太白南ニ在リ
東三條院ノ御忌月
前相模守典雅ノ狼藉
雅信魚袋ヲ解ク

正暦四年正月一日、(マヽ)官幸主殿寮下部、

二日、辛卯、東宮大饗、

〔日本紀略〕一條院　正月二日、辛卯、東宮大饗、

三日、壬辰、東三條院ニ朝覲行幸アラセラル、

〔日本紀略〕一條院　正月三日、壬辰、行幸東三(詮子)條院、公卿給祿之後、有管絃之興、主上、横笛、(左)右大臣、笙、大納言藤原濟時、箏、權中納言源時中、倭琴、參議實資、琵琶、

〔小右記〕正月三日、壬辰、巳時參內、依行幸也、今朝召使來告、子時乘輿經承明、建禮、太白在南、出御自南門、爲奇也、可被用東歟、陽明等門、臨幸東三條院、御坐土御門院、右(重信)府以下扈從、左(雅信)府參院、更召公卿御前、有御遊、主上令吹笛、今月此院御忌月、而有御遊如何、公卿以下給祿有差、戌時還御、今日有主(衍カ)鈴奏、名謁等、傳聞、於院有御拜、簾中、前相模守典(藤原)雅朝臣、乘輿還宮之間、騎馬破右近陣馳度之間、左少將隆(藤原)家捕搦、卽給看督使、而攝政殊仰事由、暫令優免、今日、攝政乘車候御輿後、左府佩魚袋、他人不著、仍左府解魚袋云々、

〔權記〕正月三日、壬辰、可有行幸土御門院、須裝束輕服可候陣、然而去夕、令信(高階)順朝臣候氣色於攝政、早著吉服可供奉者、仍用吉服、時刻行幸、晚景有御遊事、院御忌月也、而有此事、怪念々々、事了還宮、左相府著魚袋、此說吉也、然而依他卿不著解之、誤也、

〔御遊抄〕二朝覲行幸　同(正暦)四年正月三日、幸東三條院、記抄、

笛　主上御所作、御年十四、

笙　左大臣雅信、七十四、

比巴　參議實資、

箏　大納言濟時、

和琴　權中納言時仲、五十三、

南殿ニ出御
下名

七日、丙申、白馬節會、敍位、

〔日本紀略〕一條院　正月六日、乙未、敍位議、

七日、丙申、節會、

〔小右記〕正月七日、丙申、未時許參內、申時出御南殿、右(重信)大臣著靴、此間內侍臨檻、大臣進給下名、著宜陽殿兀子、召內豎、內豎同音稱唯、別當有(阿蘇)隣、入自日花門進立、內辨仰云、召二省者、退歸畢、良久之二省竝參入、給下名、先召式部、次召兵部如恆、二省退出、干(丁カ)大臣起座歸入、此間引陣、左近中將等度階下、向日花門、更引陣、無前例、諸卿(マヽ)者也、次開

雨儀

宣制

還御敍者拜

白馬陣ニ渡ル御膳ヲ供ス

坊家奏舞樂

宣制祿

門、諸卿猶在陣、須出外辨、(可脱カ)謂懈怠也、(道兼)内大臣不出外辨退出、有御陣次、(兼大將可被奉白馬奏、而退出如何、)大納言道長以下相率著外辨□□(座諸カ)司奏被付内侍所、此間小雨、仍改晴儀、用雨儀、諸卿諸大夫等參入就標、謝座謝酒等事如例、上下著座、此間内辨仰事由、令改定位記案、於承明門内壇上、内辨召余授宣命、取副笏復座、諸卿退下、列立宜陽殿、次余起座就版、宣制兩段、群臣每段再拜、新敍者不拜、制了余復座、諸卿又復、次新敍者參入、式部兵部輔進敍、先是主上還御本殿、新敍者拜舞、畢退出、次撤案、諸卿下殿再拜、余云、可有拜舞、權大納言伊周卿云、不可有拜舞、只再拜也、仍右府從之、諸卿疑云、猶可有拜舞歟、(余歸家、引見内裏式、及儀式、延喜御日記、及他文書等、記有拜舞、彼大納言說極謬也、内辨丞相隨彼一言、彌又謬也、内辨(脱アラン)侍奏也、兩大將不參故也、著第一兀子、可謂失、是左府兀子、可著也、(衍カ)第二兀子歟、)左近將監執版、次白馬渡陣、不徐步走度、依雨也、供御膳、(雖還御本殿、所令供也、)臣下膳如恆、二獻後、仰御酒勅使、(藤宰相、)其後、内辨執坊家奏、付内侍奏、(妓カ)好女於南廂舞、於射場殿發音樂、依雨儀也、舞了公卿退下、拜復座、内辨執宣命見參、付内侍奏也、即返給、復座、召(平)惟仲朝臣、右大辨給宣命、受了左廻復座、失誤也、(可用右廻者、)召左大辨、(懷忠、)授見參、宣命使宣制等如例、(但作法無便、)公卿就祿所給祿、各退出、丑時許、

〔權記〕正月七日、丙申、節會如常、内辨右相府、(六條、)南座第一兀子左大臣座也、

内論議祿

而誤著其座、計可著也、但位記筥、當第一兀子置之、仍忽不覺故實、著件座、須先著本座第二兀子、後召内豎、令置改之、敍位之後、可有親族拜舞、而依伊周大納言說、只有拜不舞、非只施(依カ)此納言之荒凉說、亦内辨誤、

〔公卿補任〕六正暦五年　非參議從三位藤隆家　同(正暦)四正七從四下、(少將勞、)

〔公卿補任〕六長德元年　參議從四位下源俊賢　同(正暦)四正七從四下、(辨頭如元、)

〔公卿補任〕六長德二年　參議正四位下藤忠輔　正暦四正七從四上、(策、)

〔公卿補任〕六寛弘二年　參議正四位下源經房　正暦四正七正五下、(少將勞、)

〔公卿補任〕七長和四年　參議正四位下藤朝經、(四十三、)同(正暦)四正七從五上、(佐勞、)

〔外記補任〕二　大外記大春日仲明　正月敍從五位下、

〔中古歌仙三十六人傳〕藤原實方　四(正暦)年正月七日敍從四位上、

八日、(丁酉、)御齋會、

〔日本紀略〕(一條院)　正月八日、丁酉、御齋會始、

十四日、癸卯、御齋會終、

〔權記〕正月十五日、甲辰、自宇治到三條、(○中略)殿(道隆)下被命云、去十四日御前論議了、賜祿之儀、御導師訖、著本座之間、王卿把笏、藏人頭取祿、目王卿、々々即起、次

導師雅慶
還昇

第進、跪右靑璅門北戸長押下、搢笏取之、進從東簀子敷、賜於僧綱以下、把笏復座云々、而伊(藤原)周納言不跪取之、亦不經簀子、直進賜之、是說未知善惡、又所不見、猶可謂失也、

後七日御修法、

〔東寺長者補任〕一　權少僧都雅慶　後七日法行之、

九日、戊戌女敍位、是日、右中辨源俊賢等ニ昇殿ヲ聽ス、

〔公卿補任〕六　正暦五年　非參議從三位藤隆家　九日、(正暦二年正月)還昇、

〔公卿補任〕六　長保三年　參議正四位下藤行成、三十、同(正暦)四正九從四下、女敍位次、佐勞、同日昇殿、

〔日本紀略〕一條院　正月九日、戊戌、女敍位、

〔權記〕正月九日、戊戌、參內、被定昇殿等事、藏人頭右中辨俊賢、去七日敍四位、卽還復云々、藏人修理亮源惟時、(中納言時中第三男、)蔭子藤原脩政、(所衆也、)右馬頭(藤原)相尹、右近少將宣方、(藤原)左少將隆家、(藤原)已上如元昇殿、備後守藤原方隆、(殿上、)藏人所雜色文章生橘爲義、檢非違使左衞門尉藤原忠親、大中臣宣政、(ママ)右源遠相、平倫範、東宮藏人紀致頼、宣方、隆家兩府將、左衞門大夫道頼(藤原)如元昇殿、右少辨爲任(藤原)、右兵衞

佐伊(脫)頼、因幡掾孝標(藤原)殿上、又有女敍位事、正四位下理兼(藤原)、左大臣北方返進、位記二卷、敍之也、從四位下行成(藤原)、年廿二、正五位下奉職(脫)、一品內親王家、以女爵給之云々、外從五位下穴太清行、內大臣家令、

十日、己亥、所所申慶之由、

十五日、甲辰、自宇治到三條、自先頭辨許、被送被聽還昇之由、

二月廿三日、辛巳、〇中略今日還昇之後、今夜初可候宿、

十一日、庚子禪林寺燒亡ス、

〔日本紀略〕一院　正月十一日、庚子、〇中略今日禪林寺有火、

〔扶桑略記〕二十七一條天皇上　正月十一日、禪林寺燒亡、

〇一代要記、歷代編年集成異事ナシ、

十三日、壬寅縣召除目、

〔公卿補任〕六

大納言正二位藤朝光　按察使、正月、止使、

正二位藤濟時　左大將、皇后宮大夫、正月十三按察使、

參議正三位藤安親　修理權大夫、正月、備前守、

正四位下藤公任　正月十三日近江守、

平惟仲　右大辨、正月十三日近江權守、

〔公卿補任〕六正暦五年　非參議從三位藤隆家　十三日（正暦四年正月）信濃權守、

〔公卿補任〕六寛弘元年　參議正四位下藤正光、四十八、同四（正暦）正十三讃岐權守、

〔公卿補任〕七長和元年　參議正四位上源道方、四十五、十三日（正暦四年正月）兼紀伊權介、

〔中古歌仙三十六人傳〕輔正卿（非件三十六人、又少將輔尹朝臣歟、）四（正暦）年正月十三日兼越前權守、

〔日本紀略〕一條院　正月十日、己亥、除目始、

十一日、庚子、於攝政宿所除目、

十二日、辛丑、除目同、

〔小右記〕正月十四日、癸卯、酉時許參內、先是中納言公季卿在陣、召除目幷下名、外記納筥奉也、返納外記、著議所、令外記召二省、以召使令傳召、二省丞參入、立日花門東庭、上卿召式部給下名、次召兵部如式、兩省退出、此間主殿秉燎、上卿召外記給除目、（納筥）出自建春、宣陽門等、向官、召使於途中申云、式部申云、下給下名、是敍位下名也者、上卿余共答云、式部省所申極謬也、依不注其官、偏所申歟、所司所存前司例、愚之又愚、其後無所申、上卿入自官東門、直欲著廳、余示

下名

雨儀

上卿ノ作法禮ヲ失ス

執筆

云、先著東廊、被問所司具不、可令著給歟、仍被著廊兀子、召外記、被問所司具不、可（所司カ）已申具候之由、仍於廊後屛下、著靴著座、外記爲時、捧納除目筥、入北面西一戶、就上卿後、奉除目、上卿示事由、更目座前令奉、其道經納言倚子下、參議座上、出南、置筥於地、奉除目、執筥經初道退出、希有之又希有也、上卿大夫又外記至愚而已、上卿召々使、稱唯、良久立西廊壇上、（雨儀、今日不可用雨儀、上卿問其由、召使申云、依入夜用雨儀者、）上卿仰云、如例、其後五位六位參入、上卿仰云、召也云々、錄等著座之間、不足二省輔座、及六位前床子、少納言辨著座後立件座、可謂違例、其後召兩省、給除目云々、如恒兩三召間、上卿起座退出、余相續退出、侍（待カ）讀了可退出也、而近代如之云々、仍所早退也、今日上卿作法失禮、不可勝記、

〔敍位除目執筆抄〕正暦四年正月十日、縣召、十三日入眼、執筆、

〔外記補任〕二

（辭兼國申任刑部丞事）大外記正五位下中原致時博士、正月返上兼播磨介、男申（申男カ）致行任刑部丞、

滋野善言　正月轉任、

少外記三園爲節　正月輔任、九月死、

安倍有親　正月任權少外記、元內匠允、

〔魚魯愚鈔〕七 兼國勘文 勘申兼國例事　左右衛門佐兼國例

(懐)令宗允亮　歷七年

正暦四年正月任左衛門權佐、

〔除目大成抄〕七 春京官二 連奏　無連奏例

從五位下行神祇權大祐大中臣朝臣公長、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、因准先例、依當職奉公勞、幷兩度御祈賞、被抽任少副卜部宿禰

兼政申轉任替狀

依奉公勞、越上﨟、轉任副官例〇中略

大中臣宗軫 正暦四年越大祐齋部守親任權少副、元權大祐、〇中略

保安二年正月十九日〇署名略ス、

文章博士大江匡衡兼官ヲ請フ

〔本朝文粹〕六 奏狀中 申官爵

從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言、

請特蒙鴻慈、因准先例、兼任辨官、左右衛門權佐、大學頭等、申佗官替狀

右匡衡、歷文章生、文章得業生、對策及第、歷檢非違使、彈正少弼、拜除當職、敍位

勞十箇年、博士勞五箇年、以儒學爲業、以風月爲資、貧而樂道、未兼溫官、賤而嗜

文章博士兼官ノ例

諸道博士兼官ノ例

文、難耐寒苦、家徒四壁、恥文籍之漸散、母已八旬、悲祿養之猶遲、伏撿故實、文章博士兼辨官例、大江朝綱卿、菅原文時卿也、兼衛府例、藤原菅根(卿脫カ)兼左(右)近衛少將也、兼大學頭例、祖父維時卿、菅原文時卿也、諸道博士兼衛府佐例、明法博士惟宗公方、兼左衛門權佐也、方今當今莅民之後、聖宰之(衍カ)輔政以來、近訪延喜天曆之故事、遠問周室漢家之遺風、去秋遇重陽之宴、誇文道之已興、今春見朝拜之儀、感聖代之復舊、繇是詩書仁義之路、照然就日、禮樂儒雅之林、靡然向風、興廢繼絕、不亦悅乎、加之伶人左衛門尉大友兼時、右衛門尉秦身高等、猶遇臨時之恩、各預不次之賞、蓋重其藝能也、夫王道無偏、孰親孰疎、臣節有漸、自微至著、燕王求賢、郭隗爲師、而四方競至、漢帝明賞、雍齒爲侯、而諸將自安、匡衡不知運命、不量涯分、强企微望、匡躬之故、唯欲令天下海外、知學校不廢、文章見重矣、嗟呼龍之爲龍、則以有文章也、鳳之爲鳳、亦以有文章也、事若不諧、道猶堙滅、誰歌堯舜之風、誰明君臣之美、望請特蒙天恩、因准先例、兼任件等官、將知文學之重、不堪懇欵之至、匡衡誠惶誠恐謹言、

正暦四年正月十一日　從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡上

〇中原致行以下ノ任官、便宜合敍ス、

晴儀　左近衛府ノ矸穢

十六日、乙巳、踏歌節會、内御物忌、
〔日本紀略〕一條　正月十六日、乙巳、踏歌、
〔權記〕正月十六日、乙巳、小舍人自(マヽ)光來、告有召之由、頭辨仰(後脱)者、給例祿、卽參入、於掖陣令案内、御物忌也、仍退出、有節會、如常云々、
十七日、丙午、穢ニ依リテ、射禮ヲ停ム、
〔權記〕正月十七日、丙午、參内、今日可有幸建禮門射禮事、而自一昨、左近衛府死穢、仍停止、
十八日、丁未、賭弓、
〔日本紀略〕一條　正月十八日、丁未、賭弓、
〔權記〕正月十八日、(丁未脱カ)賭弓、
二十二日、辛亥、内宴、是日、東三條院及ビ中宮、承香殿ニ御シテ、宴儀ヲ御覽アラセラル、
〔小右記〕正月廿二日、辛亥、今日有内宴、未時許參内、著青色綱腰、(儛劔魚袋等)仁壽殿御裝束如常、自去夜降雨、午上未畢後漸晴、然而地猶有濕、仍左大臣已下、取可有謝座否之案内、(准擬)□(有カ)可隨晴儀之天氣者、頃之、藏人右少將明理出陣召公卿、内大臣(道綱)

左大臣雅信所勞謝座　謝酒　陪膳　行酒　輔正ノ獻題

以下、近衛次將、(賴親、明理、登朝等也、)大内記爲時□等、著靴列立東庭、(先例近衛次將二人列立云々、□(雖カ)三人列立、彼時議云、猶稱之失、)□(立カ)貫首内府正(仍爲)無(三人列立、大臣列其次、而此度立舞臺西、)先例親王當舞臺乾方而立、(延長、天德之)□(例カ)當舞臺西、(乾方而立、)其程公卿難(處カ)畫立、在列只十一人而已、(無以下十六字、註ノ文ナラン、)又左(進信)大臣雖在陣座、依腰下有所勞、令奏事由、不進列謝座、々々之後、良久不授空盞、仍遣在々(列カ)次將明理於此方令把空盞、(其道經綾綺殿壇上、可定(良カ)而立、北度、似無便宜、)明理授空盞之後、退立舞臺乾方、(左少將隆)(乾失也、)謝酒了、受空盞退、歸於北幔内、然後公卿次第參上著座、次々將參上、(依無平絹青色、申宣旨、)(家昇上著座、仍在列之次、將一人參上者、須猶在列次將參上者、)(善是先例歟、)次内記參上、(著綾青色、)(一人不能參上、)(上者也、失也、)(前カ)次左大臣起陣座參上、次攝政(令カ)前撤御膳覆也、六(出カ)以前撤御膳、仍令采女取之、)(以近衛次將、令申遲參之由於攝政、參上、)其座左殿階下、度陣座前參上、次右大臣、(濟時、)參入、(始自)左大臣、(終于攝政、)次出居、次内記、次二獻、(第カ)次可卿相分而著、先獻餛飩之後、及秉燭一獻、(參照)右内三相府著西攝政著東、以次(ツヽ)持喚文人、賜帋筆、(須三獻之後喚之、)及黄昏、次將等帶弓箭遞候、式部大輔(然而又非無其例、)此間退下、輔正應召參上著座、(文人參上、在其後、)(參カ)正依座席狹、不能早上、二獻之後、公卿三獻以(ツヽ)之上侍臣行酒、(唱平勘孟儀、如節會、)三獻了、左大臣起座奏令獻題、了召輔正、々々々起座稱唯、進立大臣後、奉可獻題之由稱唯、卽座、賜大臣前筆硯書題、撤硯入柳筥、獻之、大臣取之起座進、自御座東間奏

序者伊衡

行酒

奏舞

風客詩ヲ獻ズ

匡衡詩ヲ講ズ見參ヲ唱フ

還御

攝政赤色ノ袴ヲ著ク

輔正ニ昇殿ヲ聽ス

之、置筥於前、更把笏候叙覽、了插笏返賜、復座令清書、復奏如初儀、（但此度不把笏、持筥、）其題、花色與春來、御覽了復座、大臣被問序者之次、輔正申伊衡（藤原）當巡之由、此間不詳見、（今日依座席窄狹、公卿多在侍臣座、余遂不參上、仍不細見、但奏內敎坊奏之後、可令獻題歟、頗無先例、如何、）抑女藏人等、二獻了早退、爲令供三獻喚求之間、已延數剋失也、次內敎坊別當左大將起座、於左靑璅門下、取奏之間、右大臣起座行酒、（此度、始自攝政、終于左大臣、若依三獻之禮、可始自左府也、而始自攝政、如何、）四獻、所、於御座巽方六七許尺而跪、獻之、取（マヽ）大退歸、向綾綺殿壇上、告（召カ）伶人令候樂、（先カ）（マヽ）邊進於御（盡カ）（時カ）（只カ）自令候樂、而依入晴、以笏扇驚之、次內大臣行酒、（始自左府、）次々公卿次第行酒、（或始自左府、似無定、）此間女妓奏舞四曲、舞數減例如何、風客間獻詩、右中將實方置弓於本座下、重取文臺筥、當御座巽方置之、（康保三年御日記云、向置御前歟、）退歸復座、次左大臣以下起座、進御前近候、次召文章博士匡衡（大江）、令講詩、此間左少將賴親（藤原）、於東庭唱見參、（開卽歸、似不讀、不存例歟、）先是內藏寮積綿於舞臺南頭、講詩五六許枚、御（還カ）（卽）還清涼殿、（時于也、但內宴詩、先例被講了、此度不然、）依明日攝政赤色袴之警歟、此間攝政著赤色袴、尋先例、第一之人著之、若依背（勝カ）歟、次左府可著也、而著之、依攝錄之尊歟、文人申宣旨、著綾靑色者三人、（道統、佐忠、爲時也、）式部大輔輔正昇殿、或卿達談云、大納言伊周、交座大臣傍、仍攝政（示カ）亦事由、令退長押下、故實

忌月ニ依リテ音樂ナシ

尊者三人

牽出物和歌

云、大納言非有指事、不昇長押上云々、東三條院（詮子）、中宮、爲見物御承香殿云々、

〔權記〕正月廿二日、辛亥、有內宴事云々、午上甚雨、式部大輔獻題目、花色與春來、新字韻、依服不參、先々輕服者著吉服參、然而余依有所思、不參也、

二十三日、壬子、政始、

〔日本紀略〕（一條院）正月廿三日、壬子、政始、

攝政道隆、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕（一條院）正月廿三日、壬子、〇（略）中今日攝政家大饗、

〔權記〕正月廿三日、壬子、參攝政殿、大饗也、無音樂、依主忌月也、

〔後二條師通記〕寬治三年二月一日、壬寅、天晴、

裏書、小野宮記、正暦四年正月廿三日、壬子、參攝政殿大饗、黃昏三相府被參也、此間秉燭、彼是云々、雨時々降、地猶有濕、可無便拜禮者、而攝政降立庭中、仍有拜禮、大饗如例、但尊者三人也、行酒人依例勸左府、與行酒人勸右府、（右府在中、仍行酒人、自內府後勸之、）上官祿後先奉尊者、又牽出物、（左府二疋、右府一疋、）尊者被出後、有和歌、其後大納言朝光、濟時馬各一疋、子刻許退出、

二十四日、癸丑、左大臣雅信、大饗ヲ行フ、

文書悉ク燒亡ス

〔日本紀略〕一條院　正月廿四日、癸丑、左大臣家大饗、

〔權記〕正月廿四日、癸丑、參左府、大饗也、

二十五日、甲寅、前權大納言源重光ノ第燒亡ス、

〔小右記〕正月廿五日、甲寅、寅時許前大納言重光家燒亡、權(道長)大納言同宿、乘車馳渡、在攝政新造二條第、公卿多會、內(道兼)府被向、頗無便宜、卿相參詣南院、攝政家也、下官一人不參彼殿退歸、內府若可被參者、直可被詣攝(政脫カ)第歟、轉被向納言許如何、大臣異於他人耳、火起自修善壇云々、彼權大納言二郎兒乳母、在火中不出、火消後只骸骨云々、今朝納言差勘解由判官正言被示云、過訪事返々爲勸(慰カ)、但文書悉燒亡、不取出一枚爲歎、故帥(源高明)年中行事、及臨時二卷等、付廻可送者、付使了、前大納言使盛家朝臣被送消息、是室町家事、

二十六日、乙卯、右大臣重信、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿六日、乙卯、右大臣家大饗、

〔小右記〕正月廿六日、乙卯、申時許參右府大饗、六條第、掌客使、左府(雅信)、前備前□(守カ)相方、右府、右馬助元忠、黃昏尊者被會、左府(道兼)、內府、辨、少納言、史、外記等、依例列門內而左府示事也(由カ)令入、若

牽出物

祿

拜禮ナシ

依地濕歟、又依入暗歟、主人先降立階前、諸卿爲奇、今日地極濕、不可有拜禮歟、然而依有主人雅意、拜禮如例、左府主人相竝昇階、其後內府昇也、主人攝政大饗日、尊者三人、而左府主人相竝昇、其後今兩人昇、依攝政之任重、先昇無難歟、今日頗可有用意歟、又內府自左府後著座、無便也、攝政大饗日、右府、內府同自左府後著座、左府大饗日、自右府後內府著座、如今日、可就北座人、經參議座末、著北座也、其由見故(實賴)殿御日記、又重(明脫カ)親王記、大饗作法如例、尊者二人馬各二疋、例祿加紅花打衣、亥時許事了、

〔權記〕正月廿六日、乙卯、參右府、大饗也、

二十八日、丁巳、內大臣道兼、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕一條院　正月廿八日、丁巳、內大臣家大饗、

〔小右記〕正月廿八日、丁巳、參內大臣家大饗、二條第、掌客使左府右少將隆家(藤原)四位、右府左中將正光(藤原)、正光須向左府、而依攝政命、令奉隆家於右府云々、黃昏兩相府會門下間、雨雪不止、諸卿群立中門內邊廊下、主人以隆家朝臣、不可有拜禮之由被聞尊者、源中納言藤宰相云、以誰可被聞此事乎者、余答云、以掌客使被聞宜歟、仍隨其言、仍自服(皈カ)被昇、主人出居簀子敷、兩相府著座、主人暫著親王座如例、公卿次第著座、此間秉燭、主人起座、下長押、行列一間餘許、居

家子公卿
祿
牽出物
音樂ナシ
東宮母女
御御忌日

簀子執盃、攝政、左大臣、不動座、執盃、非古實、但至攝政、依宰(ママ)相中將(藤原)令(ママ)申、四箇所三獻盃、
除主人外、四位執盃、但攝政、左大臣起座、下自長押、執盃、是前日余所(ママ)勸盃者也、攝政大饗、與座一獻、式部大輔々正(藤原)、正三位高遠(藤原)、先
例家子公卿等、兄弟姓(脫アラン)公卿勸盃者也、失前例耳、自余如例、但史生出庭中不拜
著座、此間雨止、然而地濕、仍所不拜也、仰錄(脫カ)事詞、昨日藤宰相云、申主人云々、次史生祿、次史外
記祿、次參議中納言、大納言祿、自下藤行祿、二所大饗、至上達部祿、始自大納言、又攝政殿大饗日、自尊者奉、上官被祿、
出立如例、尊者牽物(出脫カ)馬各二疋、尊者不降自南階、自腋方退也、主人至度殿、相送
尊者、若是厚禮歟、非先例、今日無樂、又無臨時絃管、主人云、忌月內、今日東宮母
女御(藤原)々忌日、仍無絃管與者、

〔權記〕正月廿八日、丁巳、參內府、大饗也、午後雪雨降、上卿一兩被參、藤大納言
參入、主人暫居親王座、召左近中將正光朝臣、少將隆家朝臣、爲請客使、召兩人
之間、隆家朝臣先參、居南簀子、仰可參左府之由、正光朝臣參右府、酉刻左右府
被參西中門之比、主人出南簀子、以隆家朝臣、被申自腋可昇給之由、依甚雨、可
無拜禮也、尊者到南簀子敷比、與主人相揖著座、尊者座定、以圓座爲主公(人カ)座、主
人勸盃左府、正光朝臣勸盃右府、主還(人脫カ)本座之後、進机、次二獻、右少將隆家朝臣、
次進餛飩、三獻之後、右少辨爲(藤原)任朝臣進申云、左府史生召サム、尊者揖、卽稱唯

祿使
祿
引出物

還座、召國(參來)平朝臣一聲、年來召聲誤也、此辨喚聲、若是右將軍口傳歟、一國平稱唯進辨後、辨仰云、史生
召セ、稱唯還座之後、召官掌、官掌二聲、官掌稱唯、立西廊砌、以此廊爲外記史座、仰云、史生召セ、
官掌揖、屈行稱唯、次進飯、次鷹飼度南庭、次汁物、次四獻、次五獻、召使、左近少將宣方朝臣、
納言座、實正等外史(脫カ)座、次左
立作(脫カ)所云々、次給史生祿、次
中納言大納言尊者祿取、右衞門督、宰相中將、予先進母屋南面戶下撤屛風、示事由於兩
人、兩人進取之、奉尊者、次引出物、尊者以下引者、其後各々分散、
大饗日、四位勸盃者、或不取、次酌或取之、取訖言(ヘ、ヘ)也、是納言
教命也、

二月大己未朔晝

二日、庚申禁中ノ穢ニ依リテ、春日祭ヲ停ム、

〔日本紀略〕一條院　二月二日、庚申、春日祭延引、依禁中穢也、是則左近府井女墮入死也、

○春日祭ヲ追行スルコト、本月二十六日ノ條ニ見ユ、

四日、壬戌祈年祭、

〔日本紀略〕一條院　二月四日、壬戌、祈年祭、

十一日己巳列見、

〔日本紀略〕一條院　二月十一日、己巳、列見、

十九日丁丑釋奠、園、韓神祭、

〔日本紀略〕一條院　二月十九日、丁丑、釋奠、園、韓神祭、

二十一日己卯大原野祭、

〔日本紀略〕一條院　二月廿一日、己卯、大原野祭、

二十二日庚辰敦道親王元服アラセラル、尋デ、親王ヲ四品ニ敍シ、帶劍及ビ昇殿ヲ聽ス、

東三條南院ニテ行フ
加冠雅信
理髮公任
參內シ給フ
攝政道隆ノ二三四女著裳
管絃
奇怪ナル祿法
宸筆ノ位記ヲ賜フ

〔日本紀略〕一條院　二月廿二日、庚辰、冷泉院第四敦道親王、於東三條南院元服、加冠左大臣（雅信）、理髮參議藤原公任、又攝政第三姬君、於同院西對著裳、廿三日、辛巳、敦道親王參內、於陽明門外脫車、攝政、內大臣（道綱）以下參仕、今夜敍四品、

〔小右記〕二月廿二日、庚辰、今夜冷泉院四親王加元服、攝政二三（原子）四娘著裳、南院云々、

廿三日、辛巳、早朝藤宰相（公任）被示送昨日案內、於東對有親王御元服儀、大臣座在南又庇、敷土敷（マヽ）茵等、自餘公卿不敷、加冠左丞相理髮藤宰相、理髮祿例宰（脫アラン）相祿馬一疋、於寢殿有著裳事、御元服事了、公卿向寢殿簀子、有管絃、宰相祿、或褂或小褂無袴、或自長（白カ）細、又殿上人疋絹者、此事等、依奇怪所示告也者、於對有御元服事、於寢殿有著裳、誠可驚怪事也、又祿法尤足奇、如此之祿會（忽カ）卒間隨有之時事也、

廿四日、壬午、修（安親）理權大夫示送一昨日事、左右內三府被參也、左府馬二疋、今二府若一疋、攝政敎胤令加元服、敍從上（脫アラン）云々、昨日四宮被參內、下神筆敍四品、兼賜勅授、又被聽昇參（登カ）、攝政內府及他公卿追從云々、

參內奏慶

冷泉院ニ參リ給フ

女院ニ參リ給フ

祭使發遣

〈權記〉二月廿二日、庚辰、參南院、四宮御元服也、理髮藤相公(家脫カ)任、加冠左府、秉燭者扶義、俊賢兩頭辨、大臣四人有引出物、亦攝政殿第二三四女君著裳、廿三日、辛巳、參四宮、加冠之後參內、先參冷泉院給、次參內給、經左近陣至弓場殿、令奏事由、次敍位四品昇殿帶劒、自冷泉院小舍來(入脫カ)告云、扈從御供之由、宮等事、次參女院(詮子)給云々、予還昇之後、今夜初可候宿、仍留不扈從、聞者、自女院又被參冷泉院、奏敍品之、(慶脫カ)

〈御遊抄〉三御元服　親王御元服加冠以下例

敦道親王、正暦四二廿三、於南院東對、

加冠　左大臣雅信、

理髮　參議藤公任朝臣、

是日、於寢殿攝政二三四娘有著裳事、先知(於カ)東對親王元服、事了、公卿向寢殿簀子、有管絃、加冠理髮之外、無祿沙汰云々、

○攝政道隆ノ女著裳ノコト、便宜合敍ス、

二十六日、甲申、春日祭ヲ追行ス、

〈日本紀略〉一條院　二月廿五日、癸未、發遣春日祭使、

廿六日、甲申、春日祭、

〈春日祭歷名部類〉春日祭　同四年(正暦)二月廿六日、甲申、祭

或曰、依禁中穢也、是左近府井女隨入死故也、

○穢ニ依リテ、春日祭ヲ停ムルコト、本月二日ノ條ニ見ユ、

三月大己丑朔盡

三日、辛卯、御燈、

〔日本紀略〕一條院　三月三日、辛卯、御燈、

六日、甲午、仁王會、

〔日本紀略〕一條院　三月四日、壬辰、於八省院東廊大祓、依仁王會也、

六日、甲午、仁王會、

九日、丁酉、直物、

〔公卿補任〕六正暦五年　非參議從三位藤隆家（正暦四年）三月、（九カ）左中將、

〔公卿補任〕六寛弘八年　參議從四位下藤通任、（三九、）十同（正暦）四三九右少將、

〔日本紀略〕一條院　三月九日、丁酉、直物、

十八日、丙午、石清水臨時祭、

〔小右記目錄〕五京官除目事　同（正暦）四年三月十日、昨日直物、次有召物事、

〔日本紀略〕一條院　三月十八日、丙午、石清水臨時祭、

〔小右記目錄〕四臨時祭事　同（正暦）四年三月十六日、臨時祭試樂事、

同十八日、臨時祭事、

召物

試樂

大祓

〔石清水文書〕五宮寺緣事抄　田中家文書附錄臨時祭下

同（二條）四年（正暦）三月十八日、丙午、石清水宮臨時祭也、○下略

二十三日、辛亥、祈年穀奉幣、

〔日本紀略〕一條院　三月廿三日、辛亥、祈年穀奉幣、

〔小右記〕長元四年八月十七日、壬辰、今日被立祈年穀使、（廿一社、）○中略余云、先年故（前）師伊周令改直座席、上官有所申、不著座側、所覺也、正暦年中歟、仰可見局日記之由了、引見暦記、正暦四年伊周所行、

二十五日、癸丑、季御讀經、

〔日本紀略〕一條院　三月廿五日、癸丑、季御讀經、

廿八日、丙辰、結願、

〔小右記目錄〕四季御讀經事　同（正暦）四年三月廿日、季御讀經定事、

同廿五日、季御讀經始事、

同廿八日、季御讀經畢事、

結願

定

二十七日、乙卯、攝政道隆ノ二女原子入內ス、

〔小右記〕三月廿七日、乙卯、○中略攝政二娘（原子）今夜入內、或云、參中宮（定子）、爲見明後日

前後ノ射手ヲ分ツ
後方ノ射手賀茂社ニ祈ル

賭弓、又云、爲備御所令參入云々、后宮(定子)定有思給歟、

○原子著裳ノコト、二月二十二日ノ條ニ、東宮ニ入ルコト、長德元年正月十九日ノ條ニ見ユ、

二十九日、丁巳、殿上賭弓、

〔日本紀略〕一條院　三月廿九日、丁巳、殿上內弓、

〔小右記〕二月廿九日、丁亥、河內守景齊來談云、昨日兩頭(源)扶義、(源)俊賢、分取殿上賭射前後人々、後方人々、夜中參賀茂成祈云々、頗似早也、又云、金剛丸被定納蘇利、脩舞裝束、令出見也、其少爲本樣借取持去、下官童稚時裝束也、○中略以府射場可爲後方出居所之事、召仰之由、府生氏胤來申、

三月廿九日、丁巳、自夜半許降雨、是日雲上賭射取案內、尙可被行云々、仍未剋許參入、前後方々、皆出居立幄搆下帳、此間雨脚頗微、左中將正光(藤原)出陣、召諸卿、其道用晴儀、甚無便、諸卿召云云、將難用晴儀、雨脚不止、可用雨儀也、公卿執弓矢、經南殿、入自明義門著座、自侍方可參入歟、出居右將實方(藤原)召右近將監重行、令懸的、左中將正光在上、上﨟可令仰歟、內監十二人度堋後、其儀如射場、最初度可度自堋前者也、攝政出自侍所著座、子息公卿起座、入侍方、攝政以出居實方朝臣、問遣兩方射手事、前方以扶義進申云、射手三人不足者、大納言道長、伊周、參議道綱、給

兩方ノ奏ヲ奉ル
勝負
龍王ヲ奏ス
懸物射分錢
還御

方之由、被示仰也、次實方申云、後方射手一人不足者、給中納言道賴、此間左大將濟時入自明義門著座、自侍方可參歟、大納言朝光當座上首、但除攝政、起座、於幔門此間細雨降、雨日被行事、所未聞也、取兩方奏、乍(挾カ)二杖、兩方奏挾一杖可奏也、失也、進御前、卽還出、執弓矢復座、主上御覽畢目給、置矢執弓、進給奏、其儀如例、召前後的付、前左少辨信賴、後丹波守道順、以後奏賜前、前奏給後、卽歸出、執硯著座、其奏書付射手公卿、次籌指、前式部丞輔尹、後式部丞理義、以矢挿腰、不持弓、數指矢執手各著座、射殿東西砌也、前西、此間左右兩相府、自侍方著座、自余後參公卿、依無座席、不候御前、々後次第射之、一度後勝、二度前後(勝カ)、三度前勝、四度後勝、五度前勝、惣□少員五、前例、未射之前、以公卿先被定前後方、又被仰度數、而無其事、似失古實、不供御膳、尤足爲奇、五度畢、的付人起座、奉的付文於上卿、奏龍王、攝津守爲賴朝臣子、殿上小舍人也、此間主人(上)入御々簾中、勝方公卿以下再拜、西上北面、先是左府退出、右大臣以下、當時相定所拜也、此間給衝重、公卿甚遲引也、自幔門、藏人所衆出、執衝重益送、更召所掌、右少將明理、令書列前後七番、公卿在之中、但射手朝經罷出了、仍縮六番、三度爲限、讀申等儀、如射場始、但不奏覽、依入歟(夜脫カ)、所掌讀了、執箇(簡カ)著的付座、以他人爲的付、內藏寮獻懸物、絹、射分錢等、藏人執之、又殊召懸物於后宮、女裝束、后宮坐射殿在南殿西廂后(マヽ)第一也、爲見物所參也、無由事也、隨番射之、右少將通任中科、三度的三、仍給懸物、藏人解懸物賜之、執之一拜出了、次主上還御、亥時許歟、今日主上著御赤色、

前方人著櫻色下襲、斑犀帶、履、近衛次將佩樋螺鈿劔、後方蹴鞠下襲、馬腦帶、鼻
切、烏螺劔、（前例、蒔繪若手（マヽ）塵等也、六、佩同螺鈿、無便事歟、）前後射人、念人、皆著麴塵、（依内宴後射而已、）

〔權記〕二月廿八日、丙戌、酉刻主上出御侍所、攝政被候、藏人式部丞輔尹、左中
辨扶義、右中辨俊賢同候、依仰、各被別前後射手等、藏人式部丞輔尹、執筆書分
取了、主上入御、攝政候御共、次前方人々詣左中辨宿所、後方人々詣右中辨宿
所、定雜事、予後方人也、余執筆書雜事、今夜方（後脱）人々詣加茂祈也、下官辨左馬頭
相尹朝臣、依有不淨之疑、不入於御社內、祈了各々歸宅、

出御
入御
前後ノ射手

前	後		
隆家朝臣	實方		
登朝	實成		
宣方朝臣	明理		
賴視朝臣	行成		
正光朝臣	相尹		
爲任	通任		
明順朝臣	景齊		

經房	朝經		
正清朝臣	憲實		
相方朝臣	道方		
知章	道順		
信順	重家		
忠輔	遠相		
惟時	通經		
輔尹	理美		
脩政	行義		
陳政	方隆		
賴光	理兼		
道忠	惟能		
伊章	貞光		
忠家	忠孝		

三月廿九日、丁巳、賭弓前勝云々、

三十日、戊午、攝政道隆ノ第東三條南院燒亡ス、

〔日本紀略〕一條院　三月卅日、戊午、巳時東三條南院拂地燒亡、攝政家、〇百練抄、二十八日ニ作ル、

〔權記〕三月卅日、戊午、南院燒亡、

四月　小盡　己未朔

一日、己未、旬、

〔日本紀略〕一條院　四月一日、己未、旬、平座、見參、

〔柳原家記錄〕九十愚昧記　永萬二年九月九日、〇略中

平座雜例等

上卿一人例　正暦四年四月一日　權大納言道長參入行事、

二日、庚申、穢ニ依リテ、平野祭ヲ延引ス、

〔日本紀略〕一條院　四月二日、庚申、平野祭延引、依東三條南院燒亡之間、犬燒死、其穢來禁中也、

七日、乙丑、擬階奏、

〔日本紀略〕一條院　四月七日、乙丑、擬階奏、

八日、丙寅、灌佛、

〔日本紀略〕一條院　四月八日、丙寅、灌佛、

〔小右記〕四月八日、丙寅、參內、有御灌佛事、余、藤相公（道綱）起陣座、於壁後淸談、此間藏人輔尹（藤原）云、可召公卿乎、余奏云、可召也、又余云、令置膝突可召、存其由出陣、後聞、

見參

犬燒死ノ穢

行事道長

昇仗座、自公卿座後召也、是依參議也云々、失禮之甚、藏人等聞此事、責失禮云々、公卿卽參上殿上、次第執布施錢置机、著座、先是、出居著座、公卿置布施之間、中納言道頼參入、仍侍從等暫不置布施、先（是カ）似侍（特カ）道頼卿之置布施、在御前之兩三公卿示氣色、先令置侍臣布施物了、不參之公卿以下布施、道頼卿著座、須遲參卿侍從布施立了後、以藏人令置等、執加自料令置也、布施物、相次著座也、而相加不參之公卿之布施、所令置不知前跡歟、次御導師芳慶、參上、引弟子六人、仍令追歸（衍カ）令二人了、御導師失錯甚多、御灌佛了、公卿次第灌佛、大中納言伊周、扇并懷帋置座前起座、未見事也、大納言顯光、灌佛後不拜、失也、中納言公季、道頼、安親、以上五人、入自額間南戸、出自額間也（マヽ）、又庇、參議公任、惟仲皆用余出入儀、侍從兩三侍（マヽ）納言（〇頼字以下ヲ二十四字ノ註文ト中忠輔、藏人理義等、汲中鉢水、失誤最甚、）權中納言（言脱カ）賢執祿、黃金賜之退下了、公卿次第退下、申時許、事了退出、

導師芳慶失錯多シ
公卿等灌佛

南殿ニ出御
警固

十五日、癸酉賀茂祭、

〔日本紀略〕一條院　四月十三日、辛未、警固、

十五日、癸酉、賀茂祭、

〔權記〕四月十五日、癸酉、天皇御南殿、覽使等飾馬、大納言伊周（藤原）卿候御前、左少將明理（應）、右中將實正（藤原）出居云々、

二十日、戊寅仁和寺躑躅會、

〔仁和寺年中行事記〕〇仁和寺本　躑躅會事

小野宮實頼（資）卿記歟、

小記云、正暦四年四月十九日、丁丑、傳聞、今日仁和寺躑躅會（改櫻會號躑躅會）云々、而依雨可及明日云々、

廿日、戊寅、民部錄林相門來、傳左府命云、昨日欲行躑躅會、而依雨止、今日改行了、參會者合（令カ）申物忌之由、

〔小右記〕四月廿一日、己卯、元卓（藤原）朝臣來云、昨日躑躅會無尊客、兩相府是主人也、其外或同緣、或子息、下臈云々、事（マヽ）晩下人鬪亂云々、會合卿相、兩府外、大納言道長、中納言時中、伊陟、道頼、參議道綱、安親、三位泰清、輔正等云々、公家賜度者、頭扶義仰講師云々、

櫻會ヲ改稱ス
雨ニテ延引ス

下人鬪亂度者ヲ給フ

二十二日、庚辰攝政道隆上表ス、仍リテ、攝政ヲ停メ、關白ト爲ス、

〔公卿補任〕六　攝政正二位藤道隆、卅一、四月日上表辭職、廿二辭攝政、勅令關白萬機、除目官奏如天慶故事、

除目官奏ヲ御前ニテ行フ

〔日本紀略〕一條院　四月廿二日、庚辰、攝政上表、卽有勅答、詔止攝政、爲（令カ）關白萬機、如天慶故事、

〔百練抄〕四一條天皇　四月廿二日、止攝政爲關白、

除病延命利益衆生ノ爲メ

犬死ノ穢ニ依リ延引

同上

二十四日、壬午、中宮萬燈會、

〔權記〕四月廿四日、壬午、參中宮(定子)、奉供十方萬燈御明、爲除病延命利益衆生也、

二十六日、甲申、廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕一條院　四月四日、壬戌、廣瀨、龍田祭延引、

廿六日、甲申、廣瀨、龍田祭、

〔左經記〕長元七年七月四日、辛卯、大夫外記云、昨日依關(賴通)白相府仰、勘申宮中觸穢時廣瀨、龍田祭例事、○中略正暦四年四月四日、犬死穢來宮中、仍改日、廿六日祭之者、

二十七日、乙酉、梅宮祭、

〔日本紀略〕一條院　四月三日、辛酉、梅宮祭延引、依同穢○犬燒死ノ穢、也、

廿七日、乙酉、梅宮祭、

二十八日、丙戌、始メテ、官奏ヲ覽給フ、

〔百練抄〕四一條天皇　四月廿八日(曜書)、主上始覽官奏、

〔小右記〕四月廿八日、丙戌、今日主上初覽官奏、仍參入、小選左大臣雅信、參入、關白被參直廬、右中辨俊賢(源)、先令覽官奏於關白云々、左大辨(懐忠)著參議之上座、□(撰カ)

御前儀

成文三枚

笏申上云奏、上日許(目カド同ジ)、大辨稱唯、見遣陣腋方、史奉(小槻)親挿書於文挿、跪候小庭、上日稱唯、著膝突、上取文、解結緒置前、披表奏帋、搔遣書於右方、一々披見、隨見置右方、了推卷、如元結中、置板敷妻、史給書、卽披書云、可候文三枚者、(左フラハム、ラむミヒラ、)上日、稱唯、取加書杖退出、上問大辨云、鉤起文三枚也、又有他吉書、相加宜歟、奏報皆有同文、無便歟者、大辨申云、此外忽無可然之吉書者、大辨起座、上以右中辨俊賢、令奏云、奏候者、(奏左不良不、)俊賢稱唯起座、頃之著膝突云、召(須)者、俊賢出敷坂(政)同(門カ)使告史、(公卿所示教也、)上起仗座、出軒廊西第二間、(當座之間、)參御所、史挿書從上之後、此間、在障上達部、向仁壽殿、見御前儀、余及一兩公卿不見、上復陣座、左大辨著本座、史直進著膝突奉書、上取一々披見如初、見了結中、給史、(先給表帋、一々可結、其後可賜結緒歟、頗違先傳、具見(實賴)故殿天慶教、)史披書云、成文三枚者、(成禮文三枚、)(脫アラン)上自(目カ)、稱唯、執副書杖退出、左府著平絹青朽葉下襲、今日猶可被著綾歟、就中著白阿古女、無威儀也、左府云、丞相達可被候官奏之由、有宣旨者、此事於陣腋俊賢問、余答有先例之由、

左大辨申左府云、從(位)祿目錄未被奏也、及五月之例、更不聞也者、左府云、令候氣色於關白、可隨命、今日有官奏、頻有奏事如何者、仍大辨起座、以左中辨扶(源)義令候氣色、早可奏聞之由、關白有命、上達部相議云、今日初有官奏、誠雖吉書、重經

位禄目録ヲ奏ス

奏聞、尚無便歟者、重取案内、有可令奏之旨、儉思此事、雖無五月例、過今日被奏宜歟、史奉覧筥文（納位禄目録及其文書等）、於上卿、次以硯置大辨座前、位禄所辨不參、仍召左少辨信（高階）順朝臣、令奏目録、（把笏帯劔、初不把笏、欲進仍左大辨示事由、令把笏帯劔、先例歟如何、）以目録納筥、參上御所、即歸出返事、（此般不把笏帯劔如何、若有議式出陣之間、待其具（ママ）歟、若者也、可尋先例、）次承上命、大辨執筆、書一紙、（更衣、侶（女カ）、御諸道博士、馬寮頭助、二寮頭助、外記等給、國々十一ヶ國、）又書殿上七ヶ國、書了奉上、見了納筥、召史賜之、同史撤硯、如例、件書出給彼所辨、若依彼所辨之不參、直給史歟、可尋事也、未時許左府、内府以下退出、

病ニ依ル勅許シ給ハズ

申文勘盃

五月　大（盡）　戊子朔

二日、己丑、左大臣雅信上表ス、

【公卿補任】六　左大臣從一位源雅信　自五月日有病辭官、然而無勅許、

【尊卑分脈】宇多源氏　雅信　正暦四年五月二日、依病辭職、無勅許、

○雅信、出家ノコト、七月二十六日ノ條ニ見ユ、

五日、壬辰、外記政、

【小右記】五月五日、壬辰、著廳、大納言伊周卿爲上、中納言伊陟卿、參議公任同著、右大辨惟仲（中）自結政可著廳、伊陟卿云、著廳參議其數不少、至大辨必不可著歟、無參議時、可著者也者、所談可然、外記注申廳事、了著南所、上卿揖、已次人入北簀、了伊陟卿以下依平（ママ）寄、此間少納言道（脩）方著座、召大舍人、大臣著座之時、參議未昇之前、少納言早著、召大舍人、是故實也、而納言著座日、今有此事、可爲違例歟、次第著座、有申文、其後如例、但少納言實成（藤原）起座、於東階下執盃勸上、所監執瓶子巡行、至最末參議惟仲辨扶義起座進受、復座下巡、此間、上卿執著（箸カ）飲食、伊陟（脩吐）署著（箸カ）、上卿更執著（箸カ）（食カ）命之、失誤也、次少納言道方起座、於酒事所下、執盃獻上卿、如初、次右少辨爲任（時原）起座執盃、（如道方、）獻上卿、爲任早不起、

仍上卿示事由令起也、見辨氣色、少納言二人在座、縱雖可重疊、可執歟、上卿及
武衛云、辨尚可起者、三獻畢置箸、入內如恆、今日少納言執盃所既背先傳、須登
自東階、於巽角柱下執盃、伊陟卿云、侍從可(合カ)酒事一二巡後、上卿可(合カ)起座給者、先
例不過三度云々、殊無難事也、小選退出、

七日、甲午、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　五月七日、甲午、奉幣伊勢、石清水、賀茂、平野、稻荷、北野等、依
臨時御祈也、

十七日、甲辰、仁王會、

〔日本紀略〕一條院　五月十四日、辛丑、於八省院東廊大祓、依仁王會也、
十七日、甲辰、仁王會、

〔小右記〕五月十四日、辛丑、午時許召使來云、今日可有仁王會大祓、可參入也、
彼所行事左大辨申障(懷忠)、仍可觸告者、稱障不參、自關白殿差師長朝臣、被示可參
大祓所之由、愁(愁カ)申可參、晚景自待賢門參入、著八省東廊座、先是辨外記史等在
座、余著座後可著歟、若簾著座、暫起座、又可還著歟、可尋事也、心中所案也、其儀、
北第二間砌上謂(設カ)壇、上敷祝師座、第三間敷上座、々巽置式筥、敷膝突、第五間敷

辨座、第六間敷外記史座、皆是東西、此間主殿寮不見、無人秉燭、仍官掌執隨身
續松在前、神祇官執引裂木綿、(居足、葛)居余及辨以下前、祝師著座、先表白、次讀中
臣祝(祓)、余置笏引裂木綿、次神祇官人捧木綿、進下官前、余執執(ヽ)之氣息、辨以下如
之、神祇官撤引裂、余起座退出、此間辨外記史尙在座、爲奇、令起座可相揖歟、

賀茂松尾平野殿上侍臣ヲ使トス

御祈ニ依ル

吉日ニ依ル右大臣奏聞

六月小戊午朔盡

七日甲子、諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕一條院　六月七日、甲子、奉幣諸社、今日參議不參、仍賀、松、平三社使、以殿上侍臣發遣之、

十日丁卯、御體御卜、

〔日本紀略〕一條院　六月十日、丁卯、御體御卜、

十一日戊辰、月次、神今食、

〔日本紀略〕一條院　六月十一日、戊辰、月次、神今食、

十三日庚午、山陵使ヲ發遣ス、

〔日本紀略〕一條院　六月十三日、庚午、發遣山陵使、依御祈也、

十六日癸酉、内文及ビ官奏ヲ覽給フ、

〔日本紀略〕一條院　六月十六日、癸酉、主上以吉日覽内文幷官奏、右大臣（重信）奏聞之、

故太政大臣爲光ノ周忌法會ヲ行フ、

〔小右記目錄〕二十一公卿薨卒事　同（正暦）四年六月十三日、一條太政大臣爲光周忌法事、

五個日

事、

○爲光薨去ノコト、三年六月十六日ノ條ニ見ユ、

二十日丁丑、雷鳴陣、是日、疾疫ニ依リ、清涼殿ニ於テ、大般若經ヲ轉讀セシム、

〔日本紀略〕一條院　六月廿日、丁丑、於清涼殿、崛四十口僧、轉讀大般若經、五个日、爲消疾疫之難也、

〔小右記〕六月廿日、丁丑、藏人右衞門尉達相來云、御讀經間、雷鳴陣立、左大將濟時先被奏云、須不令奏事由陣立者也、而年來久不立、仍令候御氣色也、有可立之仰、其後陣立、將軍云、前年御讀經間有此事云々、次將等先例左右相對西上、而今日左將者南上西面、右者北上西面、不知先例歟、御讀經朝座間云々、今日雷鳴不猛烈、

〔權記〕長德元年七月二日、參内、頭中將（齊信）云、雷鳴時陣立如例、（略カ）中藏人辨爲任云、去正曆四年又有雷鳴陣、故將軍被候其陳（陣カ）、又居南北行云々、

二十五日壬午、關白道隆、法興院三昧堂ヲ供養ス、

〔日本紀略〕一條院　六月廿五日、壬午、法興院三昧堂供養之、關白家修也、

〔百練抄〕四一條天皇　六月廿五日、關白供養法興院内三昧堂、

○兼家ノ法興院ヲ創ムルコト、元年五月十日ノ條ニ見ユ、

二十六日、癸未、故右大臣正二位菅原道眞ニ、左大臣正一位ヲ贈ル、

〔小右記〕六月廿五日、壬午、外記國定云、内府(道兼)示左衛門督(顯光)云、今日可被行菅丞相贈位贈官左大臣、位記等事云々、依詫宣所被行云々、未候官奏之間、最初行此事、依可無便、所被示屬者、勅使菅原斡正朝臣云々、

託宣ニ依ル　勅使菅原斡正

七月五日、辛卯、○中略外記多米國定、來持(持來カ)去月廿六日癸未日記、其記云、左衛門督顯光卿、右大辨惟仲、著左仗、被行故菅丞相贈位贈官之事、大内記爲時朝臣、入位記宣命詔書等於筥、奉覽上卿、件筥以厚朴木件(作カ)也、居花足小盤、置柳筥也、自藏人所々下給也者云々、上卿起座、參弓場殿、付藏人式部丞惟時奏聞、件位記宣命等、兼日覽關白殿了、仍今日令直奏聞失、(者カ)奏訖、詔書有御畫日、返給復座、内侍臨檻、上卿起座、進南殿東階邊、位記捺印如例、覆奏了、召遣鎭西使、卽散位菅原朝臣斡正、參膝突、給位記宣命等退、位記狀宣命詔書等在左、件事内大臣可被行、而依御消息、件上卿所被行也、國定云、彼日上卿催内侍、位記請印之日無此事、是彼所奇云々、

詔書御畫日　遣鎭西使

〔日本紀略〕一條院　五月廿日、丁未、贈故右大臣正二位菅原朝臣左大臣正一位、

〔百練抄〕四一條天皇　六月廿五日、菅丞相贈左大臣正一位、

〔歷代編年集成〕十七一條院　正暦四年癸巳五月廿日、被奉勅使菅原幹正朝臣、於大宰府安樂寺、贈左大臣正一位、○下略

〔政事要略〕二十二年中行事二十二八月上　贈左大臣正一位詔

詔書

詔、裒賢之義、无渝于始終、尙德之規、已毋(貫イ)于存沒、故右大臣贈正二位菅原朝臣、才高冊府、効著廟堂、挹九流以涉儒津、登三强(旌イ)以助帝道、於戲象岳之蹤、隔淸塵而惟(雖イ)迥、牛山之淚、想往年而猶新、朕副膺寶曆、祇奉璿圖、欲施錄舊之仁、以厚遠之典、可賜正一位左大臣、庶分恩渙於北闕之宸波、將照寵光於遐鎭之幽墓、布告遐邇、俾知朕意、主者施行、

正暦四年五月廿日

〔天滿宮託宣記〕一條院御時　同(正暦)四年御託宣

天滿宮託宣　宮師淨洞ニ夢告　座主松壽ニ夢告

正暦四年八月十五日、宮師淨洞夢、夜候御在所之間、子時許夢、御前へ召故撿挍鎭延大法師、仍參上、卽被仰云、依贈官事、勅使下向者、是非本意、依非舊例、更不可承引、件使來者、令知我他行之由、左右不可相定、依無面目也、種々雜事、非可仰者、同十六日夜、座主松壽大法師夢、子丑時計夢、見不知之人來告云、可參

廟院者、答云、誰人仰事乎、一家主達被集會、所被聞也云々、仍著袈裟參進、廊内外有十人、自西戸參入中門著座、四位五位數多也、其中知面之人、三位文時卿、（菅原）左近中將英明朝臣、（源）勘解由長官在躬朝臣、（菅原）山城守雅規朝臣（菅原）等也、告示云、公使下向、其事非御本意、寺司等不可承引云々、然間覺畢、

位記

御位記勅、幷答勅使御作詩二首

正二位

右可贈正一位、

中務、性比柳下、位登槐端、開廊廟之華、累儒雅之葉乎、人文振芳、雖無埋英聲於龍門之土、天爵標秀、宜追賁殊禮於鶴塗之塵、可依前件、主者施行、

正暦四年五月七日（廿カ）　○コノ次ニ詔書ヲ揭グ、上ノ政事要略ニ同ジ、

宣命

天皇我勅命乎聞坐ト宣、追往尊賢比、憐舊褒德ハ、食國令典奈リ、故是以追天贈一位ノ階左大臣ノ官乎、贈賜比崇賜布勅命ヲ、差使天申賜ハ久宣、

同年同月廿日

示勅使被返左大臣宣命、同四年、

神作ノ奉答詩

大宰府ノ解

勅使安樂寺ニ參向ス

忽驚朝使排荊棘、官品高加拜感成、雖悦仁恩覃邃窟、但羞存沒左遷名、

此御作勅使轉正朝臣讀宣命之間、自珠簾内、有青紙書、隨風出矣、卽一絕、其詞云フ、件正文詩、今在外記局、非彼御手跡、似道風手云々、或本有此詞等、書寫本無之、

北野天神御傳　并御託宣等

〔江見左織氏所藏文書〕○模相

太宰府解申言上奇異事

安樂寺菅丞相廟前案上詩一枚暗出來狀

右謹檢案内、贈官位勅使散位從五位下菅原朝臣蒭正、今月十九日到府、同廿日未時、勅使幷府行事權少監正六位上源朝臣兼政、少典正六位上伴宿禰如武等、相共參詣彼寺、勅使持位記函、置案上再拜、讀宣命畢、爰彼廟院大宮司安倍近忠、件（以カ）以位記歩進廟前之間、案上函外有青色紙書、近忠申云、件書在函外、是若漏落歟者、勅使答云、本自無青紙書者、物似神作詩、不知其所出、謹須如此神異之文、任（檢カ）搭密封言上者也、而寺司及勅使祇候宮人等、衆人共所見也、仍記在狀言上如件、謹解、

正暦四年八月廿八日　　正六位上行大典刑部宿禰

中務卿兼輔四品親王在京　　從三位（二歟）下行權大監平朝臣致光

正三位行皇后宮權大夫兼大貳藤原朝臣佐理　大監正一位上藤原朝臣（六歟）
從五位上行少貳兼筑前守藤原朝臣宣孝　大監正位上藤原朝臣（六歟）
少貳位五位下藤原朝臣延明（從歟）　正六位上行少監橘朝臣
權少貳從五位下藤原朝臣孝友　正六位上行少監清原眞人
權少貳從五位下紀朝臣　正六位上行少監秦宿禰晴正
正六位上行少監清原眞人
正六位上行少典秦宿禰
正六位上行少典伴宿禰如武
正六位上行少典蝮部良廣

〔天滿宮託宣記〕（正暦）同四年御託宣
有此記書寫本無之
正暦四季八月廿日未時、勅使參向安樂寺、卽大府被竝（マヽ）官人等、相共臨廟南之流、奉仕御祓、其後御位記之函、令持於權少監源直政、（○上ノ江見左織氏所藏文書ニハ、兼政ニ作ル、）參進御前、勅使傳請奉置案上再拜、卽讀宣命、歸去、次廟院大宮使安倍近忠、件御位記爲納御殿、持案參上之間、御函之下有青色紙書、近忠申云、此書從御函之內落歟者、勅使宣、件御函內本自無青色紙書者、爰勅使開見、又以再拜罷出之後、彼此尋問案內、不知其所出、已是奇怪也、仍記之、

權府掌（宮仕イ）依末
史生早部
權陽（湯水イ）永秦
少典伴
權少典源

託宣ノ詩

〔江談抄〕四
家門一閇幾風烟、筆硯抛來九十年、每仰蒼穹思故事、朝々暮々淚漣々、（天滿天神正暦四年御託宣、）

〔古事談〕五神社佛寺　一條院御宇、北野天神御贈位贈官、（正二位、從一位左大臣云々、）件位記詔書等、勅使菅原幹正、正暦四年八月十九日太宰府到來、同廿日未刻參著安樂寺、御位記筥ヲ置案上、再拜讀申時、絕句詩化現云々、道風之手跡云々、（○中略、前掲天滿宮託宣記ノ詩ニ同ジ、）

勅答不快ノ由議定ス

此正文被納外記局、于今有云々、今度勅答不快之由、群議定畢、

〔台記〕久安三年六月十二日、（甲辰、）天陰、午始奉幣於北野、（○中略）先之、自文殿出神

筆、○略中定信曰、神筆出現正暦四年、見解府是則道風死後及五十年也、

○日本紀略、歴代編年集成、政事要略、天満宮託宣記、竝ニ五月二十日ニ作リ、百練抄六月二十五日ニ作ル、今、小右記ニ據ル、北野縁起、菅家御傳記、二十二社註式、神階記、大鏡裏書等異事ナキヲ以テ略ス、天満天神、禰宜藤原長子ニ託宣アルコト、正暦三年十二月是月ノ條ニ、道眞ニ太政大臣ヲ贈ルコト、本年閏十月二十日ノ條ニ見ユ、

是夏、咳疫流行ス、

〔日本紀略〕一條院　六月、今月、八民悉咳疫、五六月間、有咳逆疫、

昭和三年三月七日印刷
昭和三年三月十日發行

（大日本史料第二編之一奥付）

豫約價金七圓

著作權所有

編纂兼發行者　東京帝國大學

印刷者　西濃印刷株式會社岐阜支店

發行所　東京帝國大學文學部　史料編纂掛
電話小石川（85）七〇二番・四〇一二番

大日本史料
大日本古文書

既刊目錄

（昭和三年三月現在）

大日本史料

第一編（平安時代）	第一卷至第五卷	宇多天皇仁和三年八月ヨリ醍醐天皇延長五年十月ニ至ル	五冊
第二編（平安時代）	第一卷	一條天皇寬和二年六月ヨリ正曆四年六月ニ至ル	一冊
第三編（平安時代）	第一卷至第二卷	堀河天皇應德三年十一月ヨリ寬治七年九月ニ至ル	二冊
第四編（鎌倉時代）	第一卷至第十六卷	後鳥羽天皇文治元年十一月ヨリ仲恭天皇承久三年七月ニ至ル	十六冊（完）
第五編（鎌倉時代）	第一卷至第六卷	後堀河天皇承久四年正月ヨリ建仁三年十二月ニ至ル	一冊
第六編（建武中興及南北朝時代）	第一卷至第廿三卷	後醍醐天皇元弘三年五月ヨリ寬喜三年十月ニ至ル（後村上天皇正平十六年十二月後光嚴天皇康安元年十二月ニ至ル）	六冊
第七編（室町時代）	第一卷	後小松天皇明德三年閏十月ヨリ應永二一年三月ニ至ル	廿三冊
第八編（室町時代）	第一卷至第十三卷	後土御門天皇應仁元年正月ヨリ文明十三年十二月ニ至ル	一冊
第九編（室町時代）	第一卷	後柏原天皇永正五年六月ヨリ同六年九月ニ至ル	十三冊
第十一編（桃山時代）	第一卷	正親町天皇天正十年六月ヨリ七月ニ至ル	一冊
第十二編（江戶時代）	第一卷至第廿七卷	後陽成天皇慶長八年二月ヨリ後水尾天皇元和三年八月ニ至ル	一冊 廿七冊

大日本古文書

編年文書

第一卷至第六卷（大寶二年十一月ヨリ和銅二年ヨリ寶龜十一年ニ至ル）　六冊

第七卷（追加一）至第十七卷（追加十一）（寶龜元年七月ニ至ル）　十一冊

家わけ文書

第一　高野山文書　八冊（完）

第二　淺野家文書　一冊（完）

第三　伊達家文書　十冊（完）

第四　石清水文書　六冊（完）

第五　相良家文書　二冊（完）

第六　觀心寺文書　一冊（完）

第七　金剛寺文書　一冊（完）

第八　毛利家文書　四冊（完）

第九　吉川家文書　二冊

第十　東寺文書　一冊

第十一　小早川家文書　二冊（完）

幕末外國關係文書

第一卷至第十九卷（嘉永六年六月ヨリ安政五年四月上旬ニ至ル）　十九冊

附錄之一至四　四冊